

Title	秋乃夜長物語(続) : 伝本解題並びに翻印三種
Sub Title	Revisions and annotations of three texts of Aki no yonaga no monogatari (秋乃夜長物語) (continued)
Author	平沢, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1963
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.2 (1963. 3) ,p.291- 366
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000002-0291

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

秋乃夜長物語（続）

——伝本解題並びに翻印三種——

平 沢 五 郎


正徳六年刊 「秋の夜の長物語」

慶應義塾大学附研究所属斯道文庫蔵

刊本、二冊。

装幀、美濃紙袋綴。 竪二十六・四糎。 横十八・四糎。
表紙、縹色元表紙。

匡郭、四周单边。 竪二十二糎。 横十五・七糎。

題簽、「絵入秋の夜の長物語玄恵法印上(下)」。(但し絵入の二字は圈で囲む) 

内題、「秋の夜の長物語」
刊記、正徳六丙申正月吉日

江戸日本橋南菴丁目 須原屋茂兵衛開

洛陽京極通五条上ル町 新井弥兵衛版

丁数、全四十一丁（上巻二十一丁、下巻二十丁）。丁附に重複箇所がある。即ち、一―三、又三（絵）、四―九、又九（絵）、十一―十四、又十四（絵）、十五―二十一、又二十一（絵）、二十二―二十六、又二十六（絵）、二十七―三十一、又三十一（絵）、三十二―三十五、であり、挿絵六丁分が重複してゐる。田口明良の「典籍奏鏡」に、丁数三十五丁とあるのは、この挿絵の部分を見落したためであらう。

行数、十行。字数、二十一、二字。

版心、白口、「秋夜長」、（丁附）。

本文は、終丁裏の九行で終る。その後、裏表紙見返しに、応々翁方山の跋文六行と前記の刊年記がある。即ち
 稜

此物語はもと玄恵法印の述作にて一部全躰は神祇積／教恋無常哀傷の極致是瞻西上人の一生の徳を感じ／彼法印の骨髓をあらはせし甚深の物と也最心をとゞめ／始終を味ひ見るへしされとも古来の板行所々違ひ有故に／此度本書の写しをとつて改め待るとそ書林予に稜を／こふ固辞するに不許よつて右の意趣をあらはにすと爾云／應々翁方山書（黒印）の跋文がある。應々翁方山は、江戸中期の俳人、峯山芳山とも称し、招鳩軒、應々翁などと号して、「枕屏風」（元禄九年）、「暁山集」（同十二年）「北之箱」（同十三年）等を編した滝方山（主水）―慶安四年生享保十五年没―の事であらう。

又表表紙見返しには、松、竹等の模様が刷られ、その中央に「玄恵法印 秋の夜の長物語」（但し玄恵法印は（黒で開むである））とある。

本刊本は現存本が甚だしく、江戸川乱歩氏、野村八郎氏の両御蔵本のほか、その所在を聞かなかつた。江戸川乱歩氏蔵正徳版は上下二冊が合綴され、その表紙は後補改装されたものである。最近購入した本文庫のそれは、上下二冊に分れ、表紙、題簽等、原装を保持するものである。従つてその体裁等は本文庫本に依つて改めた。

備考一、本書の本文は平仮名書きを主とした漢字交りの文体である。その漢字の多くは振仮名が施され、仮名には清濁の区別がほゞ附されてゐる。句読点はなく、和歌は別行二字下つて上下句二行に書かれてゐる。印面は鮮明で、判読不明の箇所は僅か二三を数へるにすぎない。

此の版本は種彦「好色本目録」に「類従に入れられしは、此寛永本にて正しからざる本なり、穢土をさいど、誤るの類最多し、はじめ三本（活版本、古印本、絵入本）はさまざま異同なし、正徳版は大に異るところあり」と誌すが如く、片仮名平仮名両古活字本以下寛永版江戸版等の諸版本に比し、古格を保持し、寧ろ本物語の最古鈔本たる永和三年写本、並びに幸節氏蔵絵巻に最も近似する關係を示してゐる。種彦が更に続けて「実に古写本を得て刊行なし、ならんと思はるゝことあり」と指摘したのは、従つて此の場合最も当を得た推論であつたといへる。永和本が片仮名交り文であり、本書が平仮名交り文である点、或は幸節氏蔵本が絵巻である等の相違を除けば、本文上の異同は、掲出せるが如く、他の諸写本、諸版本に比し、甚だ僅少なものであつて、当版本の祖本は、永和三年写本、幸節氏蔵絵巻等の古鈔本により由来せるものであることが認められる。以上の三本の比較は頼わしいので之を避けるが、正徳版の本文は幸節氏蔵絵巻に最もよく近似し、同絵巻との相違点―僅かな語句上の異同ではあるが―の多くは、永和三年写本に依拠する処のあるのが認められ、此の三本の依存關係は非常に緊密なるものが存し、本物語の原型を辿る一系統をなすものと考えられる。

永和本と幸節氏蔵繪卷との詞章の関連は本誌前号に比較したところであり、やはり又この系列に属する文禄五年写本―大東急記念文庫蔵―、小田清雄氏摹写本―東京大学附属図書館蔵―に就いても同様であるので、重ねて縷述するのを避けるが、以上五本を、此処に一括すると、

永和本系 第一類

(イ) 高乗勲氏蔵永和三年写本

(ロ) 幸節静彦氏蔵〔室町中期〕繪卷

(ハ) 慶應義塾大学附属斯道文庫蔵等正徳六年版
研究所

永和本系 第二類

(イ) 大東急記念文庫蔵文禄五年写本

(ロ) 東京大学附属図書館蔵小田清雄摹写本

の如き系統を示してゐる。

そしてこの第二類(イ)文禄五年写本は、第一類三本に比し、九丁表から十丁裏にかけて、かなり長文の増補がある。

但し右肩に「此以下イ本」とあり、他本にて加筆された一文であるかもしれない。即ち「先の童をたつねたるに、さる事あり、彼梅若公に付奉_レ随、桂寿とて、万情色深くして、上下に賞翫せらる_レ事、無_レ疑と語れは……云々」に始まり、「臆而、色こき紙に、思ふ心を尽程の事は、いかに書ともつくしかたければ、中々哥計」(前号三百三十四頁)に終る一章が、顕著な異同となつてゐる。

第二類(ロ)小田清雄氏摹写本は、この文禄写本の増補を殆んどそのまま受け継ぎ、加ふるに以下の如き詞章が増補敷

衍されて、本書の特色をなしてゐる。

○文禄五年写本三十三丁表

―念仏十返計唱て身を投させ給ひて候つるを余に悲しくみまひらせ候つる程に我等やかて水に入て取上まひらせんと仕候つれ共つひにみえさせ給ひ候はぬ程に力なく罷過候也とそ語て涙をはらくとこほしける―

の一章は、小田摹写本二十三丁表に於ては

―念仏十返計唱て身をなけさせ給ひ候を見まいらせて候かくならせ給はんための御十念ならはとしりまいらせて候はゞ御恨のほとは何共御いり候へ先御身にすかりとゞめ申候はんつる物を去なから我ら水に入て御しかいをとり上心の及はんほといたはり申さんとて波の底にわけ入てたつね申候へとも湖水の岩をきり山をくずゞ程のはやにて候へはさかまく水にさそはれたまひて候やらん見えすならせたまひしうへちから及はず候御いたはしやかなしやとこそ語りければ互に涙をこほしける―

と描写は至細である。

又文禄五年写本三十四丁表

―同宿共あまた取止ければよしや其むなしき御質を成共一目見て後こそ兎も角もならめと思ひて桂海はつなき捨たる海士小舟に乗て淵の底を望みみれは同宿中間共は皆裸に成て岩のはざま岸の陰まで残らすさがしけれ共曾而みえ給はねは天に仰き地に伏て泣叫ふ事不斜遙に時移りて供御の瀬といふ所まで―

の場面は、小田摹写本二十四丁表に

―同宿共あまたとりとめければさあらはいかにもして御死骸をたつね出しまいらせむなしき御顔をも今一目見まいら

せて後こそともかくもならめと思ひとりて折節かた田あまの釣人舟に竿さし湖水を栖とするか多かりければ律師立寄しかくのゆへを語り彼行衛をもたつね候はん露の間のわさをやめて此舟をかし候へかすと申されければしつ心なきあま人も岩木ならねはあらく御いたはしや我舟にて御尋候へと声々申律師うれしくて頓て船に取乗て同彼船人をあまたかたらひ爰の淵かしこの岩のはさまを尋ねくたるほとに遙のすそ田上の里近く供御の瀬と云所迄――

と小田本は逐一にその情況を詳述する。これらは前書(1)本との相違を示すものであるが、永和本系第一類三本に較べると、やはり、この両書の類似関係は否むことが出来ない。又、この両書に現れた増補敷衍の章句は云ふまでもなく後人の加筆の跡と思はれるが、此等の章句は、いかなる理由によつてか、他の諸写本――天文九年写本、天理図書館蔵〔室町末〕写本、細川家永青文庫蔵〔室町後期〕絵巻、武田祐吉氏旧蔵奈良絵本――或は両古活字版以下諸版本の中にはその痕跡を辿るべくもなく、永和本第二類の本文上の特徴を呈示するものである。

以上偶々正徳版を披見することを得たので、こゝに、永和三年本系とも称すべき本物語の一系統を概括した次第である。

〔室町後期〕絵巻 「秋夜長物語」

細川家永青文庫蔵

絵巻、二軸。

装幀、料紙鳥の子紙。紙幅三十一・三糎。

表紙、梨地色絹表紙(改装)。見返しは金紙。

本文、堅約二十九纏。

題簽、なし。

内題、なし。

奥題、奥書、共になし。

字数、每各行約十七字、廿三字。

絵図、上巻十図、下巻九図。

備考一、秋夜長物語絵巻は古く看聞御記永享十年十一月十一日の条に「晴。秋夜長物語絵二巻。自内裏被下。一覽。―と記され、降つては屋代弘賢が「道の幸」に―けふは秋の夜夢（長の誤か）物語詞書をうつす。詞寂蓮法師の筆なり。絵光長といひつたへたれどもさだかならず―と誌すが如く、すでに室町江戸を通じ、永く人々に膾炙された絵巻であつたらうことが想像されるのであるが、現存絵巻として識られるのは本絵巻と、前記幸節静彦氏蔵絵巻の二部にすぎない。本絵巻は後者に較べ、書写年代もやゝ降り、室町末から近世初頭にかけての間に作製されたものであらうか、濃麗な彩色にはともすればその調和を欠く感じもなくもないが、その結構は詳密壯麗であつて、詞書の進展につれ、絵図は物語の背景を十九図にわたつて、きめこまやかに描写してゐる。特に登場する諸人物の姿態表情には生々とした動きがとらへられ、その情感の変化が鮮かに描き分けられてゐて、詞書以上に本来が絵として賞翫するものであつたことを語つてゐる。

その絵図の描かれた箇所であるが、幸節氏蔵絵巻廿図が、本物語最古鈔本永和三年写本中の文本の段落とほぼ一致し、詞章と絵図の構成には、任意的な単なる偶然の一致とは思はれないものが存したが、本絵巻のそれは、永和本の

段分けとも、又幸節氏藏繪卷の繪図箇所とも五六ヶ所に亘り相違を示し、永和本と幸節氏藏繪卷との如き関係は見出し難く、やゝ恣意的な構想となつてゐる。言ふまでもないが、詞章と共に―後述―その繪図の構成も先行繪卷である幸節氏藏繪卷との関係は余り考へられないのではないかと思はれる。

備考二、詞書は平仮名交りの文体である。句点、振仮名、濁点は無く、まゝ異体字が散点する。和歌は本文より数字下げ上下句二行に分けて書かれてゐる。墨跡は流麗な草体で、書落し、書入れ、見消ちなどの乱れはなく、伝ふるに細川玄旨幽齋公筆といふが、その真偽は定かではない。たゞ書写年代から云へば、ほゞその時代に該当するのではなからうか。

さて本繪卷の詞書―本文系統に就いてゝあるが、天文九年写本、天理本、片仮名古活字本等と同様に、それが、永和本系、或は平仮名古活字本系の如くに、比較的すつきりとした系統を辿ることは出来難く、強いて言へば、前掲両本系の中間に位置する本文であるといふの外は無い。天文九年写本以下本繪卷等は、両本系の間にあつて、前者永和本系から平仮名古活字本―流布本―とを結ぶ、いはゞ重要な鞆帯ではあるが、それらが書写伝承の間隙を余すところなく補顛し、説明し得るものではなくて、之等は両本系と主体は一致しながらに又各々に相異るといふ推論し難い一つの類をなしてゐるが如くである。且つ又各々にその特徴を呈示し、類似と相違とを持つて、言つてみれば各個ばら／＼な存在でもある。漠然と両本系の中間に存するといふのもその意味からであるにすぎない。本繪卷の詞書も、一面に於ては、永和本系特有の詞章を保持してゐるが、他面、永和本系のみならず、流布本系共々に有する章句の省略、簡略化が著しく目立つてゐるのに気付く。

先づ永和本系のみに見られる特徴の数例を本繪卷の詞章と比較してみると、

○永和三三年写本第十三段

―御門徒ノ大衆五百余人白昼ニ左府ノ第宅三条京極エ打寄タリ近所ノ私候人五十余人身命ヲ輕シテ塞戦エトモ大衆更トモセス責入ケル間渡殿釣殿泉殿イラカヲ並ヘシ玉ノ欄干ランカン一字モ不残焼払フ―

○本絵巻

―御門徒の大衆五百余人三条京極へとりかけたるに近習五十余人身命をかるしめたゝかふといへとも大衆事ともせず責入けりわた殿つり殿藁をならへし玉の欄干一うものこらす焼はらふ―

○永和同本第十七段

―八十有余ナル老翁ヲ一人縛テ楼ノ中エ入テ申ケルハ此翁雨雲ノハスレヨリフミハツシテ落テ候ツルヲトラエテ候何トモ名ヲ付テ召使ヒ候虚空ヲ翔候ハン事ハ誰ニモヲトリ候ハントソ申ケル―

○本絵巻

―八旬はかりなる老翁をしはりて籠の中へ入て申けるは此翁は日てりの雨に雲のはつれよりふみはつして落て候をとらへてまいらせ候何とも名を御付候てめしつかへ虚空をかけり候へき事たれにもをとり候はしとそ申ける―

○永和同本第廿一段

―童ハ脚ヲ懷ノ中ニイタキテウタテシノ在様ヤ我等ヲハイカニ成ト思食テカ、ル御事アリケルソヤ梵天帝釈天神地祇只我等カ寿ヲ被召テ今一目ムナシカラヌ御カタチヲミセ玉へ声モヲシマス啼カナシメトモ―

○本絵巻

―童はあしをふところの中にいたきうたてしの御ありさまや我等をはいかゝなれとおほしめしてかゝる事はありける

そや梵天帝尺天神唯我等か命めされて今一目むなしからぬすかたを見せ給へと声をおしますなきかなしめとも―

の如く、本絵巻は天文九年写本、天理本、片仮名古活字本等に於て省略された詞章を有し、而もこの例文のみでは永和本系に非常に近似し、一見永和本系の本文をその儘伝存するかの如く見えるのであるが、本絵巻には特有な詞章省略のあとが見えて、永和本系とも天文九年写本以下三本、或は流布本系とも異なつた簡略な本文となつてゐる。因みに僅か五六例をとり上げてみることにする。比較の対象としたのは永和三年本に最も近似する幸節氏藏絵巻の詞書である。

○人間の八苦をみて穢土をいとふ時は煩惱即菩提となり天上の五衰を聞て浄土を求る時は生死即涅槃となる―幸節氏藏絵巻―

○人間の八苦をみて穢土をいとふときは生死即涅槃となる―細川家藏絵巻―

○内には玉泉の流を酌て四教三觀の月をすましめ外には黄石か道を踏て曩砂背水の風を揚たりされは或時は忍辱の衣の袖に接受の慈悲をつゝみ或時は摧伏の劍の刃に猛氣の勇鋭をふるふ―幸節氏藏絵巻―

○内にはくわうせきかあとをふむてのうしや清涼の風をあけたりある時は忍辱の衣のやいはに忿怒の勇鋭をふるふ―細川家藏絵巻―

○桂寿にかたらひよりて茶をのみ酒をたゝへてあそひける次に金の打枝の桶に薰入て色々の輕暖十重送たりければ童もはや志のふかき程を見てよろす心をへたてぬさまなりさて梅若公に思迷る心のやみいつ晴へし―幸節氏藏絵巻―

○童にかたらひより茶をのみ酒をたゝへてあそひける次に梅若公に思ひまよへる心のやみいつはれへし―細川氏藏絵巻―

○心つくしを見も中くいたはしければよしやたゝよそなからみるはかりを我方にある契にて人の情をこそ命にせめ

と・お・も・え・は・朝・行・ゆ・き・て・は・帰・り・か・へ・り・て・は・行・日・数・も・十・日・あ・ま・り・に・な・り・に・け・り・い・つ・ま・て・も・と・人・は・い・へ・と・も・長・居・せ・ん・こ・と・も・
さ・す・か・な・れ・は・明・日・は・山・へ・帰・な・ん・と・思・ひ・け・る・処・に・—幸・節・氏・藏・繪・卷・—

○心つくしを見も中／＼いたはしければ明日は山へ帰らむと思ける処に—細川家藏繪卷—

○心のしたひもうちとけてさ夜の枕を川嶋の水の流も浅からず行すゑまてのむつ事もまたつきなくに閨寒して蘭風の
夢さめやすく漏断て紅涙のわかれと／＼めかたければしの／＼をさ／＼の一ふしに—幸節氏藏繪卷—

○こゝろのしたひもうちとけてゆくすゑまてのむつこともまたつきさるにしの／＼小篠の一ふしに—細川家藏繪卷—

○月日の光をも見す苔のしつく松の嵐のひまもなく涙はそてにところせしわれのみならず道俗男女多くとられてけり
と覚て暗室にた／＼泣声のみそ聞ける其夜より—幸節氏藏繪卷—

○月日の光をもみすなくより外の事そなきさて夜より—細川家藏繪卷—

○利生方便を垂日かれを是として福を与も真実の本意にはあらず是を非して罰を行も慈悲之至也只順逆の二縁をもて
遂に無上菩提に趣しめんか為也我喜ことを人未可知—幸節氏藏繪卷—

○りしやう方便をたる／＼日かれを是して福をあたふるも慈悲の至なり順逆のえんを以て我よろこふところをは人いま
たしらす—細川家藏繪卷—

右の数例の対比に依つても解るやうに、その省略方法はかなり著るしい。処によつてはその文意も時に中断してしまふ場合すらあり、又平仮名古活字版以下諸版本に於て伝存するところの詞章も本繪卷には省筆されてゐる所もあつて—右の例文中にも認められる—而もこの様な箇所が甚だ多場面に亘つてゐるのであるが、本繪卷の絵図筆跡等から推しはかつて単なる誤写誤脱などとは、到底想像も出来ない。とすれば本書の詞書が、依拠した原本には、すでにか

ゝる形態が存したからであつたと推定するのはかはない。本絵巻の詞書が一面永和本系とかなり類似するところから考へて、永和本系伝来の過程に於て、一方増補加筆されてゆく、文禄五年写本、小田清雄氏摹写本の如き方向と、省筆簡略化されてゆく経路とがあつて、後者の如き一例として、この詞書も、その変遷の或る時相を語るものではないからかとも思はれるが、すでにその変化の跡が余りにも顯著であるがために、なか／＼にそれを迎へるべくもない。且つ又現存伝本中に之に類似する省筆の姿を求めることが出来ないで、之も又単なる想像に落るが、かうした中間的な伝本の存在が、室町末から近世初頭にかけて、様々な形で散在したのが、単に本物語に限らず、他の物語群にも現れた現象であつたのであらう。それが又或る点では本絵巻の詞書の持つ特質でもあり、その意義の存するところもなつてゐると思はれる。

本絵巻が又一方流布本と異つて、古写本系に属するもう一例を附記すると、片仮名古活字本のあたりから記載されたところの、梅若公が釈迦獄の石籠中で詠じた歌—寂莫ノ苔ノ雫ニ袖ヌレテ、涙ノ雨ノカワク間ソナキ—が同様に末載であり、やはりその辺からも、永和本系からの分脈であると考えてよいのではなからうか。

凡 例

(1)前号に引続いて此处に翻印したのは

(一)幸節静彦氏蔵室町中期頃絵巻三軸

(二)慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫蔵正徳六年版

(三)細川家永青文庫蔵室町後期頃絵巻二軸

の三本である。

(2)前記二本(一)(二)の両本は、その体裁を異にするが、解題中に記せる如く、本文系統を同じくすると思はれるので、披見の便宜上、両本を同頁上段下段と同時に掲げて、之を比較対照した。一方が仮名を主体とし、又僅かながら本文相違を示すため、上下段の本文行数は必ずしも一致しないので、幸節氏蔵絵巻函箇所を以つて、一應両本の段落として、段落毎に本文を統一した。従つて間々空白を生ずるのは已む得なかつた。

(3)本文はすべて底本通りとし、誤字、脱字仮名遣の誤り等も底本通りそのままとした。その内、誤字脱字等の特に甚だしいもの限り、(マ、)、或は(…カ)と註記を施した。

(4)底本の異体字、略字、異体の仮名等は、おほむね通行の字体に改めた。

(5)右三本には、句読点はすべて無いが、通読の便を考へて、私に読点を多く施した。それはすべて、、をもつて統一した。

(6)底本の破損、手ずれ等により、判読し得ざる処には、大略の字数を□印で埋めた。又解読に疑問を猶残す文字には□印で之を囲み、左下に(…カ)と註記した。

(7)本文の改行は、底本通りにては如何にも読みづらいので私に多く行を改めた。

(8)幸節静彦氏蔵絵巻には書写後消除された振仮名の墨痕が猶薄く残るが判然たるを除き、之を掲録しなかつた。

(9)幸節静彦氏蔵絵巻には見消ちの箇所が数ヶ所散点するが、底本通り之を掲げ、その本文に点線を施した。

(10)又幸節静彦氏蔵絵巻に就いては本論集前号誌上に、その解題を掲載したので、本号には之を省略した。

御貴重なる御蔵書の披見、翻刻の御清諾賜つた幸節静彦氏、江戸川乱歩氏、細川家永青文庫に、謹んで茲に深謝申上げる次第である。本調査に於て所在判明の本物語の伝存本は、龍門文庫蔵平仮名十二行古活字本を除いて、テキスト上の調査を一應終了した。更に平仮名十二行本の欠を補ひ得れば幸ひである。

秋夜長物語 「室町中期」絵巻

幸節静彦氏蔵

秋の夜の長物語 正徳六年版

慶應義塾大学附属 斯道文庫蔵

夫、春の花の樹頭に昇は、上求菩提の機をすゝめ、秋の月の水底に下は、下化衆生の相を顕す、天言なくして、物々皆顕示す、人心あり、孳々として、豈不勤や、若人あて、人間の八苦をみて、穢土をいとふ時は、煩惱即菩提と成り、天上の五衰を聞て、浄土を求る時は、生死即涅槃となる、茲に、諸仏薩垂の、順逆の化道をたつぬる日、罪あるをは、邪より正に入、縁なきをは、悪より善に誘給ふ、何にかいふとならば、経論に説所、書伝に載する所は、事繁は、申に言葉たらす、近来、耳にふれし

それ、春の花のじゆとうにのほるは、上求ぼだひのきをすゝめ、秋の月のすいていくたるは、下化しゆじやうのさうをあらはす、天ことはなくして、物々みなあらはれしめす、人心あり、へんくとして、あにつとめさらんや、もし人あつて、人間の八くを見て、ゑどをいとふ時、ほんなうすなはちぼだひとなり、天上の五すいを聞て、じやうどをもとむる時は、しやうじすなはちねはんとなる、かるがゆへに、しよ仏ぼさつの、じゆんぎやくの化だうをし」(一オ)めす日、つみあるをは、邪より正

事の、あまりにあわれに、不思議なりしかは、面々に、
枕を峙させ給へ、老のね覚に、秋の夜の長物かたり一申
侍

にいれ、ゑんなきををは、あくより善にいさなひ給ふ、何を
もつてかいふとならば、きやうろんの所説、書伝にのす
るところ、事しげれば、申にことばたらず、きんらい、
みゝにふれし事、あまりにあはれに、ふしぎ成しかば、
めんく、枕をそばだてさせ給へ、老のねさめに、秋の
よのなが物がたり、一ッ申侍らむ

今は昔ともや申へき、一条院の御宇に、西山の瞻西上人
と聞て、道学兼備したりし人は、本は、北嶺東塔の衆徒
に、西谷勸学院の宰相律師、桂海と云人にてそ、ありけ
る、内には、玉泉の流を酌て、四教三觀ケウの月をすましめ、
外には、黄石が道を踏て、曩砂背水の風を揚たり、され
は、或時は、忍辱の衣の袖に、接受の慈悲をつゝみ、或
時は、摧伏の劔の刃に、猛氣の勇鋭をふるふ、誠に、真
俗の倚頼、文武の達人なり
壮年の比、花の落、木○葉の散を見て、ねぬ夜の夢や、さ
めにけむ、こはそも、何事哉、我、適、タマク俗塵の境界をは
なれて、釈氏の門室に入なから、明暮は、只名聞利養に

今はむかしともや申べき、ごほりかはのあん後堀川院のぎようかとよ、に
し山瞻西上人と聞えて、たうかくけんひ道学兼備したりし人は、もと
は、ほくれいひかしだにのしゆと、(一ウ)くはんがく
ゐんのさいしやうりつし、けいかいと云人にてそ、あり
ける、内には、ぎよくせんのななかれをくみ、四けう三く
はんの月をすましめ、外には、くわうせきぎやう黄石公が道をふみ、なう
しやはいすいの風をえたり、されは、或時は、にんにく
の衣の袖に、せつしゆのじひをつゝみ、ある時は、けん
ふくのつるぎのやいばに、マまうきのようようゑつをふるう、
まことに、しんぞくのいらい、ぶんふのたつしや達者也
さうねんの比、花のちり、はのおつるをみて、ねぬ夜の

のみ赴て、出離生死のいとなみに、情ぬる事の、あさまし
 さよと、思心けりはいてきにける、臆、山より山の奥をも尋、
 柴のいほりの、しはしはかりの陰家カクレガをも、むすはゝやと
 は、思けれとも、旧縁キヅのつなく所をは、人ことに、はな
 れかたたくおもえは、醫王山王の結縁も、捨かたく、同朋
 同宿の別も、さすかに、名残をしくて、いたつらに、月
 日をそ送ける

其ノ心内にうこきて、言外にあらはれけるにや

朝々暮々風塵底 失脚誤生三十年

何レ日カ人間榮辱眼 古松陰裏看雲眠

これほとに、思立ぬる事の、かなはぬは、邪魔外道の、
 我を妨にや、さらは、仏菩薩の、擁護を憑て、此ノ願を
 成就せんと思て、石山に詣てつゝ、七日かあひた、五躰
 を地になけ、一心に誠をいたして、道心堅固即證ニ無上
 菩提トこそ、いのりける

七日に満しける夜、礼槃を枕にて、ましろみたる夢に、
 仏殿の錦帳の中より、容色美麗なる児の、いふはかりな

ゆめや、さめたりけん、こはそも、何事ぞや、我、たま
 く、俗塵ソコチのけうがいをはなれて」(二オ)、釈氏しやくしのもん
 しつに入なから、朝暮は、たゝめうもんりやうのみおこ
 つて、しゆつりしやうじのつとめをゝこたりぬる事の、
 あさましさと、思ふ心いできにければ、やかて、山よ
 り山のおくをもたつね、しばのいほりの、しばしばかり
 のかくれがをも、むすばゝやと、思ひけるが、きうえん
 のつなく所をは、人ごとに、はなれがたきならひなれば、
 いわうさんわうのけちえんも、すてかたく、同朋どうぼう同じゆ
 くのわかれも、さすがになこりおしければ、心はかりは
 あらまして、いたつらに、月日をそをくりける
 其心うちにうごきて(二ウ)ことば外にあらはれけるにや
 朝々暮々風塵底 失脚誤生三十年
 何日人間榮辱眼 古松陰裏看雲眠

これ程に、思ひたちぬる事の、かなはぬは、じやまげだ
 うの、我をさまたぐるにや、さらば、仏ぼさつの、をう
 ごを頼みて、此ぐはんをじやうじゆせんとおもひて、石

く、あてやかなるか、立いて、散まかひたる、花の木陰に、立やすらひたれば、青葉かちに、繡たる水干の、遠山 桜花、ふたゝひ、さきたるかとうたかはれて、雪の如ふりかゝりたるを、袖につゝなから、いつちへ行とも、おほえぬに、暮行けしきに、けされて、見えす成ぬと見えて、夢は則さめにけり

是則、所願成就の、夢想なりと、うれしく思て、またしのゝめの、あけはてぬに、立かへり、又外より来へき物を待様に、今や道心のをこると、待いたれば、猶、山深くすまはやと、思し心は、うちうせて、夢に見えつる、児の面影、時程も、身をはなれず、そふも、誠のうつゝならねは、せんかたなき思に、たえかねて、さてしや、若なくさむと、一爐の香を焼て、仏前に向は、漢の季夫^マ人の、○魂香の煙に、身をこかし給し、武帝の御思、身にしられ、空山の花を詠して、雲底によれば、巫山の神女、雲となり、雨となりし、夢の後○面影に立木もしらすとなけき給けむ、襄王の御涙も、よそならず

山に詣して、一七日の間、五たひを地になけ、一心にまことをいたらして、たうしんけんこ即證無上ほだひと、いのりける

七日に満ける夜、礼はんをまくらにして、ちとまどろみたる夢に、仏殿「(三オ)の錦の帳の内より、ようしよくびれいなるちごの、いふ斗なく、あてやかなるか、立出て、ちりまがひたる、花の木かけに、立やすらひたるをみれば、あをはかちに、ぬいたるすいかんの、とを山さくらに、花ふたゝひさきたるかとうたがはれて、雪のことくに、ふりかゝりたるを、袖につゝみなから、いつかたへゆく共、おほえぬに、暮行けしきに、きえさりて、みえす成ぬと見えて、夢はすなはちさめにけりこれ則、しよぐわんじやうじゆの、むさうなりと、うれしく思て、しのゝめのあけはてぬまに、たち」(三ウ)

〔挿絵 第一図〕(又三オ)

〔挿絵 第二図〕(又三ウ)

かへりぬ、ほかより来へき物をまつやうに、いまやたう

山王の神侘マに、我一人の衆徒をうしなふも、三数カの劔を、さかさまに、呑かことしと、悲給しかは、我か離山をは、何様、山王の惜思食て、道心をは、さまたけさせ給にや、たとひ、さ様の神慮なりとも、命メいきてこそ、法燈の頽風に向をも、挑けむすれ、暮待程ツレの、露の身もあらし、いまはと思わひければ、石山の観音をこそ、かこち申めと思て、又石山へそ詣ける

〔絵 第一図〕

しんおこると、まちゐたるところに、なを、山ふかくすまばやと、思ひし心は、うせて、夢にみえつる、ちごのおもかけ、時のほとも、身をはなれず、たちそふも、まことのうつゝならねは、せん方なき思ひに、たへかねて、さてもや、もしなぐさむと、一爐の香かうを焼たきて、仏前にむかへは、かんのりふじんの、はんごんかうのけふりに、身をこかし給ひし、ぶていの御おもひも、身にしられ、くうざんの花を詠て、うんていにのぼれば、ぶさんのしんぢよ、くもととなり（四才）、雨と成し、夢のゝちのおもかげ、たつきもしらず、なけき給ひけん、しやうわうの御なみたも、よそならず

山王のしんたくに、我一人しゆとをうしなふは、三尺の劔を、のむがごとしと、かなしみ給ひしかば、我りさんを、いかさま、山王のおしみおほしめして、道心を、さまたげさせ給ふにや、たとひ、さやうのしんりよ成とも、いのちいきてこそ、ほうとうの頽風たふさにむかふをも、かゝげんずれ、暮まつほと、つゆの身もあらし、今はと思

三井寺の前を、すきけるに、降ともしらぬ春雨の、顔に
ほろくとかゝりければ、雨やとりせんとおもひて、金
堂のかたへと行所に、聖護院の御房の庭に、老木の花の、
色ことなる、梢、垣にあまりて、雲をしけり、遙に人家
をみて、花あれば則入、と云、詩の心に引て、門の傍に、
立寄たれば、齡二八はかりなる児の、水魚紗の水干に、
薄紅ウスベニのあこめかさねて、腰圍ほそやかに、けまわしふか
く、みやひかなるか、みる人ありとも、しらさりけるに
や、御すの内より、庭に立出タチて、雪をもけにさきたる、
しつゑの花を、一ふさ手にをりて

降雨に、ぬるともをらん、山桜、雲のかへしの、風も
こそふけ

と、**打**詠して、花のしづくに、立ぬれたる躰、これも花
かと、迷カはれて、さそふ風もやあらむと、しつ心なけれ
は、おほふはかりの袖もかなと、雲にも、霞にも、かゝ

ひければ、石山のくはんおんをこそ、かこち申さめとお
もひて、又いしやまへそ」(四ウ)まうでける

三井寺のまへを、すぎけるに、ふるともしらぬ春雨の、
かほに、ほろくとかゝりければ、しばらく、あまやど
りせんと思ひて、こんたうのかたへくたりゆく処ニ、し
やうごゐんの御ばうのにわに、老木の花の、色ことなる、
こずゑかきにあまりて、くもをかくせり、遙見はるかみ三人家んか
花はな便入はなはちい、と云、詩の心にひかれて、門のかたはらに、

立よりたれば、よはひ二八ばかりなるちごの、水魚紗のす
いかに、うすぐれなるのあこめかさねて、**よ****う**いほ
そやかに、けまはしふかく、みや」(五オ)びやかなるか、
見る人ありとも、しらさりけるにや、御すの内より、にわ
に立出て、雪おもけなる、した枝の花を、一ふさたおりて
ふる雨に、ぬるともおらん、山さくら、雲のかへしの、
かせもこそふけ

と、うちながめて、花のしづくに、立ぬれたるふせい、
これも花かと、まとはれて、さそふ風もやあらんと、し

るへき心なむしけるに、心なき風の、扉トボソをきりくと、吹ならしたるに、人にやと、あやしげにみやりて、花を手にもちなから、懸の本をめぐりて、しつかにあよむに、みるふさのごとくにて、ゆらくと、かゝりたる、かみのすそ、柳のいとに、うちまわりて、引留たるを、ほれくと、見かへりたる目つき、顔の匂、いふはかりなきさま、行へなく、我を迷つる、ゆめのたゞちに、すこしもたかはねは、いまのうつつに、みし夜の夢はうちわすれて、日暮とも、行ぬへきかたもおほえず

其夜は、金堂の縁に、ひれふして、夜もすから、なかめわひぬ

これや夢、ありしやうつゝ、わけかねつ、いつれにまよふ、心なるらむ

〔絵 第二図〕

夜あけぬれは、又昨日の所にゆきて、御房のかたわらに、徘徊たるに童のいときよげなるか、ぬきすの下の、水す

づ心なければ、おほふ斗の袖もがなど、くもにもかすみにも、かすへき心地なんしければ、心なき風の、とぼそをきりくと、ふきならしたるに」(五ウ)、人あるかと、あやしげに見やりて、花を手にもちなから、かゝりのもとをめぐりて、しづかにあゆむに、見るふさのごとくにて、ながくと、かゝりたる、かみのすそ、やなぎのいとに、うちまとはれて、引とどめたるを、ほれくと、見かへりたる目つき、かほのにほひ、いふはかりなきさま、行衛なく、我をまよはしつる、夢のたゞちに、少もたかはねば、今のうつゝに、みし夜のゆめは、うちわすれて、日くるれども、行ぬへき方もおほえず

其夜は、こんたうのゑんに、ひれふして、よもすから、ながめわびぬ」(六オ)

これやゆめ、ありしやうつゝ、わけかねつ、いつれにまよふ、こゝろなるらむ

夜あけぬれは、又きのふの所へ行て、御坊のかたはらに、やすらひたるに、はらはのいときよげなるが、ぬきすの

てんとて、門の外に出たるを、これや、もし、昨日の児
の、童見侍なりしと、おもひて、立寄つゝ、ちと物とひ申候
はん、と云ければ、なに事にて候やらんとて、事の外な
る、けしきもなし

律師、うれしく思て、昨日、此院家に、水魚沙の水干め
されて、御年の程、十六七に見えさせ給候つる、少人の
御事や、知まいらせ給たると、問は、童、うちわらひて、
我こそ、この御方に、めしつかわるゝ物にて候へ、此御名
をは、梅若公と申候、御里は、花蘭の左大臣殿にて候、
御心わくかたなく、いつわりのある世とたにも、思食れ
ぬ程の、はかなき御心あてにて候へは、一寺の老僧、若
輩、春におくれたる、一木の花を見て、よそに散心もな
く、中秋の月の、くまなきに、皆我家の光を、あらそふ
なる風情にて候を、此ノ御所の御様、あまりにゆるすか
たなく、御渡候程に、管絃数哥の席ならては、御出も候
はず、いつとなく、深窓の内に向て、詩をつくり、哥を
よみて、等閑に、月日をすこさせ給候なりとぞ、かたり

したなる、水すてんとて、門の外に出たり、是や、もし
きのふのちごの、ゆかりなるらんと、思ひて、立よりつ
ゝ、ちと物申さんと、いへば、何事にて候やらんとて、
ことの外なる、けしきもなし

りつし、うれしく思ひて、きのふ、此るんかに、水魚紗
のすいかんめされて、御としのほど、十六七斗にみえさ
せ給へる」(六ウ)、せうじんの御事や、しり参らせさせ給
ひ候と、とへば、わらは、うちゑみて、我こそ、其御かたに
めしつかはるゝものにて候へ、御名をは、梅若公と申、
御さとは、花ぞの左大じん殿にて候、御心わく方なく、
いつはりのある世とたに、おぼしめさぬほどの、はかな
き御心あてにて候へば、一寺じの老僧らうそう、ぢやくはいも、春
にをくれたる、一木の花を見て、よそにちる心もなく、ち
うしうの月の、くまなきに、みな我家のひかりを、あら
そふなるふぜいにて候を、此御しよの御やうカ、あまりに
ゆるぐ方なく、御わたり候程に、くはんげん」(七オ)数
歌の席ならでは、御出も候はず、いつとなく、しんさう

ける、聞につけて、いとゞ、心もうかれぬれば、臆、此
 童をつかひにて、つほの石ふみつてにも、心の奥をしら
 せはやとは思とも、あまりに、ひたゞけたらんわさ^ももさ
 すかなれば、石山へはまいりもせて、これより又、我山^カ
 へそ帰ける

〔絵 第三図〕

律師は、夢とうつゝとの面影に、おきもせず、ねもせて、
 夜をあかし、日を暮しけるか、聖護院のかたはらに、昔
 しりたる人のありけるを、たつね出て、或時は、詩哥の
 会に事をよせ、或時は、酒宴に興たる躰にて、一夜二夜
 をあかす事、たひくゝに、なりにけり

其後、さきの桂寿にかたらひよりて、茶をのみ、酒をた
 ゝへて、あそひける次に、金の打枝の桶に、薰入て、色
 々の軽暖、十重、送たりければ、童も、はや志のふかき
 程を見て、よろす、心をへたてぬさまなり、さて、梅若
 公に、思迷る心のやみ、いつ晴へしとも、おほえぬよし

の内にむかつて、しをつくり、哥をよみて、等閑に、月
 日をわたらせ給ひ候也とぞ、かたりける

きくに付て、いとゞ、心もうかれぬれば、やがて、此わ
 らはを使にて、つほの石文^{いじ}つてにても、心のおくをしら
 せばやとは思へども、あまりに、ひたゞけたらんは、さ
 もさすがなれば、石山へはまいらで、これより又、わが
 山へぞかへりける

りつしは、夢とうつゝとのおもかげ、おきもせず、ねも
 せて、夜をあかし、日を暮しけるが、しやうごゐんの
 (七ウ)かたはらに、むかし、知たる人ありけるを、たつ
 ね出して、ある時は、しいかのくわいに事をよせ、ある
 ときは、しゆえんにけうを、もよほしたるていにて、一
 夜二夜をあかす事、度々に成にけり

其後、さきのけいじゆにかたらひよりて、茶香^{ちやかう}をすゝめ、
 酒哥^{しゆか}のけうをなして、あそびけるついでに、こがねのう
 ちえだのたち花に、たきもの入て、色々のけいたん、十
 しゆをくりたりければ、わらはも、はや心さしのふかき

をかたりければ、桂寿、まつ御ふみを給候へ、申入て見候はんとぞ、申ける

思心をつくす程の、ことの葉は、いかにかくとも、つくしかたければ、中くうたはかりにて

しらせはや、ほのみし花の、面影に、たちそふ雲のまよふ心を

童、文を懐より取出て、是御覧候へ、いつそや、雨の夕、花の木陰に、立ぬれて、御渡候けるを、或数奇人、ほのかに、みたてまつりて、人しれす、思そめける袖の色、はや紅のふりいて、なくはかりに、つゝみかねたるさまに、見え候そやと、申せは、若公、かほうちあかめて、文のひほを、とかむとし給ふに、出世なる、なにかしの僧都とやらん云人、渡殿の板、ふみならして、内へ入に、此文を見せしと、袖中に、押かくし給つ、桂寿、便あしと、ひまを待て、日暮まで、祇候したるに、しはらくありて、書院の窓より、御返事かきて、さしいたし給たり童、取手もかるく、うれしく思て、いそぎ持て行たるに、

ほどを見て、萬、心をかぬさま也、さて、梅若公に、思ひまよへる心のやみ、いつはるべし共、おほえ」(八才)ぬよしを、かたりければ、けいしゆ、まつ御ふみを給はりて、申入て見候は、やと、申ける
思ふ心をつくす程の、ことのは、いかにくろみすぐる共、つきかたければ、中々哥斗にて

しらせはや、ほのみし花の、おもかげに、たちそふ雲の、まよふころを

わらは、文をふところよりとり出して、御らん候へ、いつそや、雨のゆふへの、花のかげに、たちぬれて、御わたり候けるを、ある人の、ほのかに、見奉りて、人しれず、思ひそめける色も、はやくれなるの」(八ウ)ふり出て、なく斗に、つゝみかねたるさまに、みえ候ぞやと、申せは、わかきみ、かほうちあかめて、ふみのひほを、とかむとし給ふところに、出世なる、なにかしのそうずとやらん云人、わたどののいた、ふみならして、内に入に、此文をみせじと、袖の中に、おしかくしたまふ、け

律師、目もあやに悦て、誠に身もあらぬ躰なり、ひらひて見れば、これもことの葉はなくて

憑ますよ、人の心の、花の色に、たちそふ雲の、かゝるおもひは

〔絵 第四図〕

律師、此御返事を見て、心いとゝうかれて、更に、立帰へき心地もせず、相みぬさきの別も、せんかたなく、覚しかは、しはらくは、あたりなる坊に、とゝまりて、よそなから、そなたの梢をも見つゝ、暮さはやとは思とも、それもさすかに、うちつけなれば、又こそまいり候はめと、桂寿に、暇をこひて、山へかへりけるか、一足歩ては、見かへり、二足あよみては、立とゝまりければ、春の日永と云とも、程ちかき、坂本の坊までも、行つかつて、日暮れば、戸津の辺にありける、はにふの小屋にそ、留

いしゆ、びんぎあしと、ひまをまちて、日くるゝまで、しこうしたるに、しばらく有て、しよるんのまとより、御返事あそはして、おし出させ給ひたる

わらは、とるてもかろく、うれしく思ひて、いそぎもちて行たるに、りつし」(九オ)、めもあやに悦て、身もあらぬさまのてい也、ひらきてみれば、これもことばはなくてたのまずよ、人の心の、花のいろに、あたる雲の、かゝるおもひは

りつし、御返事を見て、心いとゝうかれしかは、さらに立かへるへき心ちもせず、あひみぬさきの別わかれも、せんかたなく、おほえしかば、しばしは、あたりなる宿に、猶もとゝまりて、よそなから、そなたのこずゑをだに見つゝ、くらさばやと思へども、それもさすか、うちつけなれば、又こそまいり候」(九ウ)

〔挿絵 第三図〕(又九オ)

〔挿絵 第四図〕(又九ウ)

はめと、けいしゆに、いとまこいて、山へ帰りけるか、

ける

終夜、思あかして、朝になれば、山へ登とて、庭まで出たれども、千引の繩を、腰に付らんかごとく、我ならぬ心にひかれて、戸津より引返して、又、大津の方へそ、あくかれ行ける

雨しめやかに、降ければ、蓑笠うちきて、旅人の貞に、身をやつして、行処に、唐笠さしかけたる、騎馬の客、道にゆきあひたり、誰なるらんと、みやりたれば、桂寿にてぞ、ありける

桂寿、律師を見つけて、あなふしきや、申へき事ありて、しらぬ山まで、尋まいらんとしつるに、うれしくも、まゐりあひたる物かなとて、馬よりとひをりて、律師か手をひきて、傍なる辻室にぞ、立寄ける

何事にやと、問は、桂寿、懐より、色ことに、こかれ^{たる}○文の、ふる袖さへ、くゆるはかりに、ほひたるを、取出して、いかなる山に、きまよふとも、きしはかりをしるへにて、尋まいれと、仰候つる、けしからすの、御

一あしあゆみては、見かへり、二足行ては、立かへりし

ける程に、春の日なかしといへとも、ほとちかき、さかもとの坊までも、行つかて、日暮ければ、戸津のへんに有ける、はにふのこやにぞ、とまりける

よもすから、思ひあかして、あしたになれば、山へのほらんとて、庭まで立出たれども、ちびきのなわを、こしに付たらんかごとく、我ならぬ心に、引とめられければ、とづより又引返して、大津の方へそ、あくかれ行ける

雨（十オ）しめやかに、ふりければ、みのかさうちきて、たひ人の形に、身をやつしつゝ、行程に、からかささしかけたる、むまのりの、道にて行あひたり、たれなるらんとみやりたれば、けいじゆにてぞ、ありける

けいしゆ、りつしをみて、あなふしきや、申べき事ありて、しらぬ山まで、たつねまいらんとしつるに、うれしくも、まいりあいて候物かなとて、馬よりとひおりて、りつしの手をとりて、かたはらなるつちだうにぞ、立よ

心まよひや、まして、一夜の後の袖のうへ、さこそは露のと、たわふれて、うちゑめは、律師も、せめて、別をななく事にて候はやと、たわふれて、文を見れば
 いつわりの、ある世をしらて、たのみける、我こゝろさへ、うらめしの身や

〔絵 第五図〕

御所の傍に、知たる衆徒の房の候へは、それに、しはらく、御座候て、玉簾のひまをも、御心につかけられ候へか
 しと、童、頻にいさなへは、思方に心ひかれて、律師、又、三井寺へ行ぬ

桂寿、しはしか程、宿かりて、或房の学問所に、をきた
 れは、其坊の主、ねむころなるさまににもてなして、こゆるきのいそぎあ○常には、児

りける
 さて、何事にやと、とへば、けいじゆ、ふところより、色ことに、こがし(十ウ)たる文の、ふるゝ袖まで、くゆる斗にほひたるを、とり出して、いかなる山に、道まよふ共、きゝし斗を、しるべにて、たつねまいれと候つる、けしからすの、御心まよひや、まして一夜の後の御袖のうへ、さこそは露のと、たはふれて、うちわらへば、りつしも、せめて、わかれをなげく事にて候はゞやと、たはふれて、文をみれば

いつわりの、ある世をしらて、たのみけん、我こゝろさへ、うらめしの身や

御しよのかたはらに、しりたるしゆとの坊のさふら(十一才)へは、しばらく、ましくて、ぎよくれんのひまをも、御心につかけられ候へかしと、はらは、しきりにいさなへば、思ふ方に引心なれば、りつし、又、三井寺に行ぬ

けいじゆ、しはしが程、やどかりて、あるぼうのがくも

とも、あまた出しつゝ、管絃をし、褒貶の哥合なんとしてそ、日をすこしける

律師は、所願の事ありて、新羅大明神に、七日参詣するよしをいゝて、夜になれば、院家の傍に、立まきれ、築山の松の木陰、前栽の草の露の底に、かくれ居たるに、若公、はや心得たる気色にて、人目もかなと、求さまさなれとも、かなはて、出かねたる心つくし、見も、中くいたはしければ、よしやたゝ、よそなから、みるはかりを、我方にある契にて、人の情をこそ、命にせめとおもえは、朝行、ゆきては帰り、かへりては行、日数も、十日あまりになりにつけり

いつまでもと、人はいへとも、長居せん事も、さすかなれは、明日は、山へ帰なんと思ける処に、桂寿来て、申けるは、今夜こそ、あの御所へ、京より客人の御入候て、御酒宴にて候つれ、門主も、いたく酔せ給いて候へは、ふけすくる〇帰らて、祇候せよ、めしくせられて、これへ忍やかに、御入候へきよし、仰られ候つる、門さゝて、

んじよに、をきたれば、其ばうのあるじ、ねんころなるさまにて、つねには、ちごたち、あまた出して、くはんげんをし、ほうへんの哥合などしてそ、日を過しけるりつしは、しよぐわんの事ありとて、しん羅大明神に、七日さんけいするよしをいひて、夜になれば、ゐんかのかたはらに、たち(十一ウ)まきれ、つき山の松の木かげ、せんざいの草のつゆのそこに、かくれゐるに、わかきみも、はや心へたるけしきにて、人目もかなと、もとむるさまなれ共、かなはで、出かねたる心づくしを、見るに、中くいたはしければ、よしやたゝ、よそなから、見るはかりを、我方にあるちぎりにて、人のなさをこそ、いのちにせめと思へは、あし手たゆく、行てはかへり、かへりてはゆく、日数も、十日あまりに成にけり

いつまでもと、人はいへとも、なが居せん事も、さすかなれば、あすは、山へかへらんと(十二オ)、思ひける処に、けいじゆ来て、申けるは、今夜こそ、あの御しよ

御待候へと、いそかしけに、いゝすてゝこそ、帰けれ

〔絵 第六回〕

「上巻終

律師は、是をきくよ□□、魂乱て、いつくにある、□身とも覺す、ふけゆくかねの、つくくと、月の南に、めくるまで、待かねたる処に、唐垣の戸を、人のあくる音すれば、書院のすき障子より、遙に立出たるに、例の童先に立て、魚腦の燈炉に、螢を入れて、もちたり、光幽にして、○臙^膝なるに、此君、金紗の水干^{カッ}、なよやかに、うちしほれたる躰にて、みる人もやと、懸の下に、たちやすらひたれば、みたれてかゝる青柳の、いと云はかりなく、みえたるに、律師、いつしか、はや、ほれくと成て、あるもあらぬさまなり

童、まつ、内へ入て、螢をは、紗窓の軒に懸て、書院の戸を、ほとくとたゝき、是に御渡候哉らんと、案内す

へ、京よりきやくじんの御入候て、御しゆえんにて候つるほどに、もんしゆも、いたくよはせ給ひて候へば、ふけすくるまで、しこうせよと、おほせ候つる、門さゝで御まち候へと、いそがしけに、立ながら、いひすてゝぞ帰ける

りつしは、是をきくより、心うかれて、たましゐもみたれて、いづくにある、身共おほえず、ふけ行かねの、つくくと、月のみなみに、めぐるまで、まちなねたる処に、からかきの戸を、人のあくる」(十二ウ)をとすればしよゐんのすぎしやうじより、はるかに、見出したるに、れるのわらは、さきに立て、ぎよなうのとうろに、ほたるをともして、もちたり、其かけ、せいけいとして、もうろうたるに、わかきみ、金しやのすいかん、なよやかに、うちしほれたるていにて、みる人もやと、かゝりの下に、たちやすらひたれば、みたれてかゝるあをやぎの、いとふはかりなく、みえたるに、りつし、いつしか、はや心ほれくと成て、あるもあらぬさま也

れは、律師、□へき方をしらて、ちと傍に、身をそむく
る、気色はかりあるよしを、知せたり

童、庭に立帰、はやと申せは、若公、先にたちて、妻戸
より、内へ入ぬ、さしも間遠ならず、袖のうつり香も、
身にふるゝはかり、よりそひて、打傾たれは、嬋娟たる
秋の蟬の、はつもとゆひ、宛転。たる蛾眉の、黛の匂、
花にも嫉れ、月にもそねまれぬへき、もゝのかほはせ、
ちゝの媚、絵にかくとも、筆におよひかたく、語に、詞
もなかるへし

涙とゝもに、むすほゝれし、心のしたひも、うちとけて、
さ夜の枕を、川嶋の、水の流も、浅からず、行すゑまで
の、むつ事も、またつきななくに、閨寒して、蘭風の夢、
さめやすく、漏断て、紅涙のわかれ、とゝめかたければ、
しのゝをさゝの一ふしに、あけぬとつくる、鳥のねも、
うらめしく、をのかきぬく、ひやゝかになりて、立別
なむとするに、明方の月、窓の西より、くまなくさし入
たれば、ねみたれかみの、はらくと、かゝりたるはつ

わらは、まつうちへ入て、ほたるをは、のきのれんだい
の、はし」(十三才)にかけ、しよゐんの戸を、ほとく
とたゝきて、是に御わたり候やらんと、あん内すれば、
りつしは、こたふべきやうもなく、ちとかたはらに、
身をそはむる、けしき斗にあるよしを、しらせたり
はらは、にはにかへりて、はやと申せは、わかきみ、さ
きにたちて、つまとより、うちへ入給ひぬ、さしもまと
をなりしに、其袖のうつりがも、身にふれるばかり、よ
りそひて、うちかたふきたれば、せんげんたる秋のせみ
の、はつもとゆい、ゑんてんたる蛾の、まゆずみのにほ
ひ、花にもねたまれ、月にもそねま」(十三ウ)れぬへき、
百のかほばせ、千々のこび、ゑにかくとも、筆にもをよ
びがたく、かたるに、ことはもなかるへし
なみたと共に、むすほれし、心の下ひも、打とけて、こ
やのまくらを、河しまの、ながれも、あさからず、行末
までの、むつことも、またつきななくに、ねやすさましく
して、しらんの夢、さめやすく、漏絶て、こうるいのわ

れより、眉のにほひ、ほげやかに、ほのかなる顔の、思へる色ふかく、みえたるさま、わかれて後の面かけに、また、あふまてを待程ホトの、命あるへしとも覺す

〔絵 第七図〕

律師は、君を送て、暁出たりつるまゝにて、いまた内へも入す、門の唐居敷の上に、たちかねたる処に、童、又来て、御文とて、指出たり
あけてみれば、言、さしも、おほからて

わか袖に、やとしやはてむ、きぬくの、涙にわけし、
在明の月

律師、書院に歸て

友に見し、月を名残の、袖のつゆ、はらはていく夜、
歎あかさむ

かれ、とめがたければ、しのゝをぎゝの一ふしに、明ぬとつぐる、鳥のねも、うらめしく、をのがきぬく、ひやゝかに成て、立わかれなんとするに、あけかたの月、まどの西より、くまなく（十四オ）さし入たれば、ねみだれかみの、はらくくと、かゝりたるはつれより、まゆのにほひ、ほげマやかに、ほのかなるかほの、思へる色ふかく、みえたる有さま、わかれて後のおもかけに、又、あふまてをまつ程の、いのちあるべし共、おぼえず

りつしは、わかぎみをくりて、あかつき出たりつるまゝにて、いまだ内へもいらす、門のからるしきに、立かねてゐたるところに、わらは、又来て、御文を、さし出したるをみれば、ことばゝさしもかゝで（十四ウ）

〔挿絵 第五図〕（又十四オ）

〔挿絵 第六図〕（又十四ウ）

我袖に、やとしやはてん、きぬくの、なみだにわけし、有明の月
りつしは、しよゐんにかへりて

〔絵 第八図〕

律師は、夢とたに、思わかさりつる面かけを、身にそへ、ふれつるそでの、うつり香をゝのか物から、形見にて、山へ帰たれば、心しほれ、魂うかれて、世の人事の、物云かはす、返事もせられず、只、泣としも覚ぬ涙、人目に余て、おさふるそれでも、朽はてぬへければ、ちといたはる事有と、披露して、人に対面をもせず、臥沈てそ、日を送けり

童、此由を伝聞て、若公に、かくと語申ければ、若公も、誠に、おほつかなく、心苦敷き事に思て、気色、常よりも、うちしほれ給へり、今もや、音信あると、暫く心に籠て、待給けるか、あまりに、日数も経にければ、童を呼寄て、さても、ありし夜の、夢のたゝちも、うつゝすくなきに、おとろかすたよりもなくて、程へぬるを、誰^誰方のつらさになしてか、そのまゝに、やかては、遠さかりはつへき、風の心地とやらん、聞しも、露の命、いかゝ

友に見し、月を名ごりの、袖のつゆ、はらはていく夜、
なげきあかさん

律師^{りし}は、夢とだに、思ひもわかざりつるおもかけを、身にそへ、ふれつる袖の、うつりかを、をのかものから、かたみにて、山へかへりたれば、心しほれて、よの事、人のものいひかはす、返事もせず、たゝ、なくとしも、おほえぬなみだの、人めにあまりて、〔十五才〕おさふる袖も、くちはてぬべき、心ちなんしければ、ちといたはる事ありと、ひろうして、人にたいめんもせず、ふししづみてぞ、日ををくりける

はらは、此よしをつたへきゝて、わかきみに、かくとかたり申ければ、わか君も、まことに、おほつかなく、心くるしき事と、思ひくづをれ給ひけり、いまもや、おとつれありと、しばらくは、心にこめて、まち給へと、あまりに、日かずつもりければ、けいじゆをよひて、さてもありし夜の、夢のたゝちも、うつゝすくなきに、おとろかす、たよりもなくて、ほど〔十五才〕ふりぬるをは、

成ぬらん、もしはかなくなりなは、なからむ跡をとふても、其かひなし、いかなる山のおくマそれとも、たつねゆかはやと、思へとも、申置事なくて、まかてなは、門主の御意、さこそと思はれて、其もかなはず、ゆくへも知ぬ、あた人の、たゝ云捨し、ことの葉を、誠かほにて、我に心をつけしも、誰せしわざそや、今の程に、我をしるへして、何なる山、いつくの浦なりとも、たつね行と、かこち賜て、涙をはらくとこほし給ふ

さスかに、いまたいとけなき、あたし心にて、人に又なく、思カつきぬるは、するわさもなき習なれは、けにも理かなと、童思知て、其人の在所をは、委承候しかは、御供申候はむ、御所の御意、あしく候はゝ、後に何とも、申させ賜へとて、若公と桂寿と、たゝ二人、行へき方も知す、立出ぬ

〔絵 第九図〕

たが方のつらさになしてか、其まゝにて、やがては、遠ざかりはつへき、かぜのこゝちとやらん、聞しは、露のいのちも、いかなりけん、はかなくなりなは、なからんあとをとひても、其かひなかるべし、いかなる山のおくなりとも、たつねゆかばやと、思へ共、申おく事もなくて、此まゝ、いでなば、門しゆのぎよい、さこそと思はれて、それもかなはず、行急もしらぬ、あた人の、たゝいひすてし、ことのはを、まことにして、我に心をつけしも、たがせしわざそや、はや、今の程にも、我をしるべマにして、〔十六オ〕いかなる山のおく、いづくのうらなり共、たつねゆけと、かこち給ひて、なみだをはらくとこほし給ふも、さすが、いまだいとけなき、あだし心にて、人に又なく、思つき給ふも、ことはりにおぼえて、わらハは、申けるは、その人のざいしよをは、くわしく、うけ給はりて候ひしかは、御供申候はん、御所の御意、あしく候はゝ、後に何共、申させ給ひ候へとて、わか君とけいじゆと、たゝ二人行べき方もしらず、立出ぬ

若公は、元来、三台九棘の家に生て、香車宝馬の駕なら
ては、かりそめにも、いまた泥土をふみ給はねは、足た
ゆみ、心つかれて、更に、歩かね給へり、童、あまりに、
いたはしさに、いかなる天狗、はげ物なりとも、我等を
とりて、比叡山へ、のほせよかしといひて、唐崎の松の
陰に、やすらひたる処に、年いとたけたる山臥の、四方
輿に乗たるか、輿を前に、かきすへさせて、是はいづく
より、いつちへ、御渡候やらんと、問ければ、童、あり
のまゝに、答てけり

山伏、輿よりおりて、我こそ、御尋候坊の隣へ、のぼる
物にて候へ、あまりに御いたうしく、見たてまつり候へ
は、我はかちにて、歩候はむ、此輿にめされ候へとて、
児と童とをかきのせ、力者十二人、鳥のとふかことくに
ゆきけるか、茫々たる、湖水をしのき、濛々たる、雲霧
を分て、片時か間に、大峯の尺迦の嶽へそ、昇もてゆき
ける

こゝに、盤石をたゞみたる、石の楼の中に、搗籠て、置

わか君は、元来、三台九棘たいきうじよくの家にむまれて、香車室馬しつばの
のりものならでは、かりにも、末泥土でいどを「(十六ウ)ふみ
給はねば、あしたゆみ、心つかれて、さらに、あゆみか
ね給へり、御手を引けるわらはさへ、くたひれはてけれ
ば、あはれ、いかなる天ま、けしやうの物なりとも、わ
れらをとりにて、ひえの山へ、のぼせよかしといひて、湖
水みづの月に、心をいたましめ、からさきの松のかけに、や
すみゐるところに、としのほど、いとたけたる山ふし
の、四方ごしにのりたるが、こしをまへに、かきすゑさ
せて、是はいづくより、いづかたへ、御わたり候やらん
と、とひければ、わらは、有のまゝに、こたへてげり
山ふし、こしよりおりて、「(十七オ)我こそ、御たつね候
坊のとなりへ、のぼるものにて候へ、御いたはしく、見
奉候へば、我はかちにて、あゆみ候はん、此こしにめさ
れ候へとて、ちごとわらはとを、かきのせて、りきしや
十二人、鳥のとぶがことくに行けるが、はうくたるこ
すいをしのぎ、みやうくたる、くもきりを分て、へん

たれば、よるひるの境も知す、月日の光をも見す、苔のしづく、松の嵐の、ひまもなく、涙はそてに、ところせし、われのみならず、道俗男女、多くとられてけりと覺て、暗室に、たゞ泣声のみそ、聞ける

〔絵 第十図〕

其夜より、若公、失給ぬる事、たゞ事にあらすと、門主御歎有て、いたらぬ猥マなく、御尋ありけれども、知人、さらになかりけり

さるに、東坂本より、大津へとほる、旅人行合て、さやうのおさあひ人は、夜部、いぬの剋はかりに、唐崎の方へこそ、御渡候しかとそ、かたりける

さては、此間、連々忍て、いひかよはず、山徒のありとさきしか、かとひ取てけりとて、院家の周章は、申に及す、一寺の醜陶、なのめならず、父のおとゞ、存知し給はぬ事は、よもあらし、山門へ寄せむするは、難儀なる

しが程に、大みねのしやかのだけへぞ、かきもて来り、こゝにて、はんじやくをたゞみたる、石の楼ろうの中に、おしこめて、おきたれば、よるひるのさかいもしらす、月日のひかりをもみず、こけのしづく、松のあらし、なみたのかはく隙もなし、(十七ウ)たうぞくなんによ、おほくとらはれけると、おぼしくて、暗室あんしつの中に、たゞなくこゑのみぞ、きこえける

其夜より、わかきみの、うせ給ひぬる事、たゞ事にあらずと、門主御なげき有て、いたらぬくまもなく、御たつねありけれ共、しる人、さらになかりける処に、ひがしさかもとより、大津へとをる、旅人行たあひて、さやうのおさあひ人は、きのふの、いぬのこく斗に、からさきはまにて、み奉りて、侍るよしを、申せは、さては、此間、忍ていひかはす、山徒とのあると聞しが、何さま、かどひとりてけりとて、みんかの(十八オ)しゆうしやうは、申にをよばず、一寺じのうつたう、なのめならず、父の大臣も、しり給はぬ事は、よもあらし、山門へよせん

へし、先、花園の左符の第へ、押寄て、恨申せとて、御門徒の大衆、五百余人、白昼に、左符の第、三条京極へ押寄たるに、近所の祇候人、五十余人、身命を輕して、ふせきたゝかへとも、大衆ことゝもせず、責入ける間、渡殿、釣殿、泉殿、いらかをならへし、玉欄干、一字も残らず焼払はる

〔絵 第十一図〕

園城寺衆徒、是にも猶、憤を散せずして、一寺一同に、僉議しけるは、寺門の恥辱、これにすきたる事、あるへからず、所詮、此次をもて、当寺に、三摩耶戒壇を建は、山門、さためて、寄せむすらん、是即地の利につゐて、敵を亡す謀、又は邪^執○をしりぞけて、戒法をひろむる、道たるへし、天こゝに、時を与たり、慥も、遲疑すへからずとて、一味同心の衆徒、二千余人、如意越路、所々掘切て、寺中を城郭に構て、やかて○摩耶戒壇をそ建たりける

事は、いとやすけれとも、まづ、花そのさふのていへ、おしよせて、うらみ申せとて、御もんとの大しゆ、五千余人、はくちうに、さふの亭宅、三条京極へ、おしよせたるに、きんじよに、しこうの人、五百余人、しんみやうをかるくして、ふせぎたゝかふといへども、大しゆ事共せず、せめ入ける間、わだ^マ殿、つり殿、いづみ殿、いらかをならへし、たまのらんかん、一うものこらず、みなやきはらひけり」(十八ウ)

上巻終

おんしやうじのしゆと、是にも猶、いきどをりさんせず、一山一同に、せんぎしけるは、寺門^{じもん}のちじよく、是に過たる事、あるべからず、しよせん此臨をもて、当寺、三まやかいだんをたてば、山門、さだめて、よすらん、是則てきをほろぼすなかたち、又は、邪^{じやう}執をしりぞけて、かいほうをひろむる、道たるべし、天こゝに、時をあたへたり、しはらく、透^マ擬すへからずとて、一味^みだうしんのしゆと、二千余人、によいごえの道、所々ほりきり、寺中をじやうくはくに、かまへて、やがて、三まやかい

〔繪 第十二回〕

山門、是を聞て、なしかは、蜂起せさるへき、戒壇の事に依て、園城寺へ発向する事、以前、既に、六ケ度也、公家に奏し、武家に触訴るまでも、あるへからず、時をかへす、押寄て、焼払へしとて、末寺末社、三千七百三ヶ所へ、触送に、先、近国の勢、馳集て、山上坂本に、充滿せり

十月十五日は、中の申日なり、是にまさる吉日、あるへからずとて、十万騎の勢を、七手に分て、追手、搦手より押寄る、或は、渺々たる、志賀唐崎の浜路に、駒に鞭うつ、衆徒もあり、或は、漫々たる、煙波湖水の朝なきに、船にさほさす、大衆も有、思々に、よせける其中に、桂海律師は、今此濫觴は、併、我身カより、おこりし殃なれば、人よりさきに、一合戦して、名を後記に、とゝめむする物をと、思ければ、すくりたる、同宿若黨、五百人、皆神水吞て、五更の天のあけぬまに、如意越よりそ

だんをぞ、たてたりける」(十九オ)

三二六

山門、是を聞て、なしかは、ほつきせさらむ、かいだんの事によりて、おんじやうしへ、はつかうする事、以前すでに六ケ度也、くげにそうし、ぶけにうつたるまでもあるべからず、時をうつさず、おしよせて、やきはらへとて、まつじまつしや、三千七百余所へ、ふれをくるに、先、きんごくのせい、はせあつまりて、さん上、さかもとに、充滿たり

十月十五日は、中のさるの日にあたれり、是にまさる吉日、あるへからずとて、十万よきを、七手に分て、おしよする、あるひは、べうくたる、しがからさきのはまぢに、こまにむちうつ、しゆ」(十九ウ)ともあり、あるひは、まんくたる、ゑんはこすいの、あさなきに、舟にさほさす、大しゆもあり、思ひくゝに、よせける其中に、けいかいりつしは、此らんしやうは、しかしながら、我身より、事おこりし、わざはいなれば、人よりさきに、

寄たりける

追手、搦手、城の内、すへて十万七千人、同時に、時のこゑをあげたれば、大山も、是が為にくすれ、湖水も傾て、忽に、水輪際におつるかと、疑はる

手負をも返みす、死をもいたます、のりこえく、攻入る、寄手には、本院に、習禅、禅智、円宗院、杉生、西勝、金輪院、杉本、山本、妙観院、西塔には、常喜、乘実、南岸、行泉、上林坊、横川には、善法、善住、般若院、三塔蜂合議云す、是等○を先として、押寄す

禦く大衆には、円満院の鬼駿川、唐院七天狗、南院八金剛、千人切の荒讚岐、かなさいはうの悪大夫、八方破の武蔵房、三町飛礫の円月坊○、さけきりこのみの覚増、儀を金石に比し、命を塵芥にかるくして、打出く、ふせきたゝかふ、鍔申胃を融し、鋒煙塵をまきて、三時はかり、たゝかひたるに、寄手七千余人、手負て、半死半生に成ければ、此城、尽未来際をふとも、落へしとも、みえさりけり

一かつせんして、名をこうきに、とゞめんする物をと、思ひければ、すぐりたる、とうじゆく、わかたう、五百余人、みな、じんずいのみて、五かうの天の、あけぬまに、によいこえよりぞ、よせたりける

大手、からめで、城の中、都合十万七千余人、同時に、時の声をあげたれば、大山も、これがためにくづれ、「(二十才) こすいも、かたふきて、たちまちに、こんりんざいに、おつるかと、うたがはれ、ておい共いはず、死人をもかへりみず、のりこえ、はねこえ、せめ入けりよせてのほんるんには、習禅、禅智、円宗院、杉生、西勝、金輪院、杉本、山本、妙観院、西塔には、常喜、乘実、南岸、行泉、行住、上林、横川には、善法、善住、般若院、三塔蜂合の儀云す、爰をせんどと、ふせぎたゝかふ

おんじやうじの大衆には、円満院の鬼駿河、唐院の七天狗、南院の八金剛、千人切の荒讚岐、金さいばうの悪大夫、八方やぶりの武蔵房、三町礫の円月坊、さげ「(二十

桂海、是をみて、大にいかつて、申けるは、いけかひなき人々の、合戦のしやうかな、いく程もなき、堀一は、死人にて、埋めたらんに、なとか、責落さてはあるへき、我と思はむ人々は、つゝいて、桂海か、手からの程を見よと、あくまで荒言吐て、やけむ掘の、そこせはなる中へ、かはと飛おり、二丈あまりにみえたる、切岸の上へ、たてのさんを踏て、はねあかり、ぬりのこしたる屏柱に、手うち懸、ゆらりとほねこへて、敵三百人中へ、只一人、乱入

さけ切、袈裟かけ、車切、そむきてもてる一刀、しさりてすゝむ追懸きり、将碁倒の払切、磯打波のまくり切、らんもむ、ひしぬひ、くもて、かくなは、十文字、四角八方を、追立、足をもためず、切てまはるに、如意越をふせきける、兵三百余人、かなはしと思けむ、左方右方へ、おちてゆく、からめての勢共、つゝいて、責入ける中に、桂海か同宿共、爰かしこより忍入、院々谷々に、火をかけたるに、魔風頻に吹て、余煙、四方に、掩けれ

ウ) ぎりこのみの覚僧房、儀を金石にひし、いのちをちんがいに、かるくして、うち出く、ふせぎたゝかふ、やじり、かつちうをとほし、ほこ、ゑんちんをまきて、三時ばかり、たゝかひたるに、よせて七千人、手おひて、はんしはん生に成てければ、此城、尽未来際をふるとも、おつへしとは、さらに、みえざりけり

けいかい、是をみて、大きにいかつて、申けるは、いひかひなき人々の、かつせんもしざまかな、いく程もなき城一ツ、死人にて、うづめたらんに、なとか、せめおとさてはあるべき、我と思はんともからは、つゞひて、「(二十一オ) けいかひが、手からの程を見よと、あくまで、くわうげんはいて、まづ、城のそこせはなる中へ、かたととびおり、二丈余にみえたる、切きしの上へ、たてのさんをふまへて、はねあがり、ぬりはづしたる、へいばしらに、手を打かけて、只一人、やぶり入けり、もとより、さんとのたしなむ所也

さげきり、けさかけ、くるまぎり、ことさらうち物取て

は、金堂、講堂、鐘楼、経蔵、常行三昧の阿弥陀堂、普賢行願の如法堂、教待和尚の御本房、智證大師の御影堂、三門跡の御房に至まで、すへて三千七百余宇、一時に灰燼と成はてゝ、新羅大明神の社壇より外には、残坊一もなかりけり

〔絵 第十三図〕

「 中巻終

ぶさうなりければ、そむきてもちたる一刀、切てすゝむあけ切、しやうぎたをしのはらひ切、いそうつ波のまくり切、らんもん、ひしぬい、くもで、かくなわ、十文字、四方はらひのおがみ」(二十一ウ)

〔挿絵 第七図〕 (又二十一オ)

〔挿絵 第八図〕 (又二十一ウ)

切、八方かけて、おいたてく、足をもためず、切てまはる間、によいこえをふせぎける、つはもの三百余人、かなはじとや思ひけん、うわうざわうに、おちて行、つゞいて、せめ入ければ、けいかいが手のもの、五百余人はしりちつて、ゐんく、たにくに、火をかけたるに、風しきりに吹て、よゑん、そらにおほひければ、金堂、講堂、鐘楼、経蔵、常行三昧のあみだたう、ふげん行願の如法堂、教待和尚の御本房、ちせう大師の御ゑいだう、三門跡の御坊にいたるまで、すべて三千七百余宇、一時に、くわいぢんと成はてゝ」(二十二オ)、しん羅大明神のしやだんより外は、残るばう一ツもなかりけり

若公は、三井寺の、か様に成ぬるをも、しらせ給はす、石の楼の中に、おし籠られて、明暮、なきしつみて、おはしける処に、無量の天狗共、集て、四方山の物語ともしける中に、或小天狗、申けるは我等か面白と思ふことは、焼亡、颯、小さいさかひ、論の相撲に事出し、白川ほこのそらいんち、山門南都の御輿振、五山の僧の門徒立、此等こそ、興在見物も出来て、一風情在と、思つるに、昨日の三井寺の合戦は、世にたくひなき、見こと哉と、申せは、また、そはなる天狗、かしこくそ、此梅若公をとりたりける、さらすは、これ程の軍、何故か出来へき、戦の最中に、寺の門主たちの、長絹の衣けたれて、方々へにけさせ給しか、おかしさにこそ、興ある折句の哥を、一首よみて候しかと、語を、座上の天狗、何と読たりけるそと、問ければ

うかりける、はち三井寺の、ありさまや、戒つくりては、ねをのみそなく

若公は、三井寺の、かやうに成ぬるをも、しらせ給はず、石のろうの内に、おしこめられて、あかしくらし、なきしづみて、おはしける処に、むりやうの天狗共、あつまつて、よも山の物かたりをしける中に、ある小天狗、申けるは、我らがおもしろしと思ふ事は、焼亡、辻風、こいさかい、論のすまいの事出し、白川ほこのそらるん地、山門南都の御こしふり、五山の僧の門徒だて、是等にぞけうあるけん物も」(二十二ウ)出来て、一風情有と、思ひつるに、きのふの三井寺のかせんは、世にたくひなき見事成しと、申せば、又、かたはらなる天狗のいはく、いしくも、此梅わかぎみを、取たりける、さらては、是ほとどのいくさ、何ゆへに出来くべき、かせんのさいちう、寺のもんしゆたち、ちやうけんの衣、けさふみくゝみて、方々へ、にけさせ給ひしは、ことさら、おかしかりし事どもなり、こんどのけんぶつは、我らが、ずいぶん、ちうさくしすましたりと、申せば、又、かたはらなる天狗、われこそ、けうある、おりくの哥を、一しゆよみて候ひし」

と、読て候也と、かたれば、座中の天狗共、えつほに入脱カてそ、わらひける

若公、是を聞食て、あなあさまし、さては、三井寺、我ゆへ、ほろひけるやと、思給へとも、委尋聞へき、人もなければ、只童と共に、脱カうちわひて、なくより外の、ことそなき

かゝる処に、淡路国よりの物とて、八十有余はかりなる老翁を、一人しはりて、楼の内へ入て、申けるは、此翁日てりの雨雲のはつれより、ふみはつして、土におちて候つるを、とらへて置候、何とも名を付て、めし仕候へ、虚空を翔候はんこと、誰にも、おとり候はしと、覚え候、水なんと、くませさせ給候へ、人におとり候はしとそ、申ける

一兩日在て、此翁、兒と童との泣悲を見て、若、御袖やぬれて候と、問ければ、兒も童も、共に、住なれし所を、かりそめになく、立分て、此天狗道に落ぬれば、父母の悲、師匠の歎、思やらるゝたひことに、涙のおちぬひま

(二十三才)かと、かたれば、座上の天狗ぐ、何とよみたりけるととへば

うかりける、はち三井寺の、ありさまや、かいつくりては、音をのみぞなく

とよみて候也と、かたれば、座中の天狗共、ゑつほに入てぞ、わらひける

わか君、是をきゝ給ひて、あなあさましや、さては、三井寺、我ゆへに、ほろびにけるやと、おもひ給へ共、くはしく、たづねきくべき、人もなければ、たゝわらはと共に、うちわびて、なくより外の、事ぞなき」(二十三ウ)かゝりける処に、あはぢの国より、しんもつとて、八十有余ゆうよなる老翁ちうおうを、一人しはりて、ろうの内へ入て、申けるは、此おきな、日てりの雨雲のはづれより、ふみはづして、土におちて候を、とらへてしんし候、何共名を付て、めしつかはれ候へ、こくうをかけり候はん事、誰にも、おとり候はしとそ、申ける

一兩日ありて、此老翁、ちごとはらはとの、なきかなし

なければ、さこそは袖も、ぬれて候らめとそ、答ける
 老翁、大に喜て、さ候は、我にとりつかせ給へ、やす
 く、都へ、つけ申候はんとて、翁、此若公の袖を、しほ
 りてみるに、白玉か何そと、人の問はかり、涙の露、滴
 たり、翁、此露を、左の手に入れて、しはらく円閃電転するに、
 露の玉、程なく、鞠の勢に成ぬ、是を又二にわけて、右
 左の掌に入れて、ゆるかしけるに、二の露、次第に、大に
 成て、石の楼の内、滔々たる、大海の如に、成にけり
 此時、老翁、忽に大龍と成て、雷鼓、地を動し、電光、
 天にひらめく、さしも義勢の天狗とも、畏怖播……イ本、十方へ逃
 失ければ、龍神、石の楼を踢破て、児童のみならず、あ
 らゆる所の、道俗男女を、雲に乗て、大内の旧跡、神泉
 苑の辺にそ、をきたりける

〔絵 第十四図〕

むをみて、もし、御袖やぬれて候と、といければ、ちご
 もわらほも、共に、すみなれし所を、かりそめながら、
 立出て、此天狗道てんぐだうにおちぬれば、父母、ししやうのな
 (二十四才)げき、思やらるゝたびごとに、なみたのおち
 ぬひまなければ、さこそは袖も、ぬれて候らめと、答け
 る
 らうおう、大きによろこびて、さ候は、我に取つかせ
 給ひ候へ、たやすく、都へつけまいらせんと、いひて、
 翁おきな、此わか君の袖を、しぼりて見るに、しら玉か何そと
 人のとふばかり、なみたのつゆ、したぐりたり、おきな、
 此露を、ひだりの手に入れて、しはらく円閃電転せるに、露の
 玉、程なく、まりのせいに成ぬ、是を又二に分て、左
 右のたな心に入て、ゆるかしむるに、二つの露、次第
 に、大きに成て、石のろうのうち、みな(二十四ウ)大
 水に成てげりマ、此時、老翁、たちまちに、大りうと成て、
 らいこ、地をうごかし、てんくわう、天にひらめき、さ
 しも義勢きせいの天狗共、おそれをぢて、十方へ、にげさりけ

道俗男女は、皆分て、こゝより、自かさまくへ帰ぬ
若公と童とは、我古郷を尋て、花苑へ行給へは、さしも
藁をならへ、作られたりし、亭宅茅臺、皆焼野の原と成
て、こと問へき、人しなし

あたりなる僧坊にて、事の由来を、尋ぬれば、左大臣殿
は、公達の若公、比叡の山へ、うははれさせ給て候也、
御里に、しろしめされぬことは、候はしとて、三井寺よ
り寄て、焼払て候也とぞ、かたり申ける
をとゝの御行へ、尋問程は、立よるへき宿もなければ、
さらは、三井寺へ行て、門主の御ことをも、尋申さむと
て、たとるく、童に手を引れて、三井寺に行て、見給
へは、仏閣僧坊、一字も残らず、皆焼払れて、閑庭の草、
露に泣、空山の松、風に吟す、是そ我棲すてし、昔の跡

れば、りうじん、石のろうをけやぶつて、ちごはらはの
みならず、あらゆる所の、たうぞくなんによを、雲にの
せて、大内きうせき、しんぜんゑんの辺にぞ、をきたり
ける

此もの共、みなわかれて、こゝより、をのがさまく、
かへりさりぬ

わかきみと、わらはとは、我ふるさとをたづねて、花そ
のへ行給ひたるに、さしもいらかを「(二十五才)ならべ
て、つくられたりし、茅宅亭台はうたくていだい、みな焼野のはらと成て、
こととふべき、人もなし

あたりなる僧房にて、事のさまを、たづぬれば、左大臣
殿は、きんたちのわか君、ひえの山へ、うばゝれさせ給
ひて候を、御さとにしろしめされぬ事は、あらじとて、
三井寺より、おしよせて、やきはらひて候也とぞ、かた
りける

大臣の御行衛、たづね参らせんほど、立よるべきやども
なければ、さらは、三井寺に行て、もんしゆの御事をも、

よとて、みれば、礎の石も、焼碎て、苔の緑も、色かはり、軒端の梅も、えたかれて、匂にまちし風もなし物ことに、替はてぬる、世のなかあはれ、只我ゆへなりし、ことなれば、神慮ニもたかひ、人口にも落ぬらんとあさましく覚えて、見にめもあてら^れねども、年久、棲なれし跡なれば、やかて、見捨も、名残惜ければ、其夜は、新羅大明神の拜殿に、湖水の月をなかめて、泣明しつ

〔絵 第十五図〕

門主は、若石山にや、御座在らむとて、尋行給たれば、是にも御座なしと、申ければ、桂寿、さ候は、今夜は、参詣の人の躰にて、本堂に御座候へ、我、山門へ罷出候て、律師の御房を、たつね申候はんとぞ、申ける

たづね申さんとて、たどるく、わらはに手を引れて、三井寺に行て、「(二十五ウ)見給へは、ぶつかく、そうばう、一字ものこらず、みなやきはらひて、閑庭の草、露にしほれ、くうざんの松風を聞に、すしくして、是そ我すみし、むかしの跡よと、みれば、石ずへの石も、やけくたけて、こけのみとりも、色をかへ、のきばの梅も、えたくちて、にほひをまちし、風もなし物ごとに、かはりはてぬる、世のあはれ、た我ゆへ也し、事なれば、さこそ、神慮にもちがひ、人口にもおちぬらんと、あさましくおほえて、みるに目もあてられね共、年ひさしく、すみなれし跡なれば、やがて、みすてんも、名「(二十六オ)残おしくて、其夜は、しん羅大明神のはいでんに、湖水の月をながめて、なきあかしつもんしゆは、もし石山にや、御座あるらんとて、たつねゆき給ひぬれと、是にも、後座なきよし、申ければ、けいじゆ、さ候は、今夜は、さんけいの人のていにて、ほんたうに御座候へ、我、さんもんへ罷のぼりて、りつ

若公、今はたゞ、浮世にあらぬ、身と成らんと、ふかく
思定給ふ心、おはしければ、よしやなか／＼、とりとゝ
むる人なくは、心のまゝに、いかなる淵河にも、身をし
つめむと、思食て、なく／＼、消息かひて、童にたひけ
るに、是をかきりとは、よもしらしと、あはれにて、そ
ろに、涙をなかし給ふ

童、御文を給て、いそぎ、山へ尋のほりたれば、律師、
童を見より、さらに、物をも云えず、たゞまづ、さめ／＼
とぞ、なきける、童も涙をしのこひて、此間、ありつる
ことともを、語らんとすれば、まづ御文を、み候はむと
て、おしひらきけるに、あやしき哥のことは在

我身さて、しつみもはては、深せの、底まで照せ、山
の端の月

律師、あはて、これ御覧候へ、御哥心本なく、みえて
候へは、何ことをも、みちすから、御物かたり候へ、先、
急参候はむとて、坂本より、童を先に立て、取物もとり
あへず、石山へ馳て行

し御房を、たづね候はんと、申ければ、わかきみ、いま
は、うき世にあらぬ、身とならんと、ふかく思ひさだめ
給ふ御心ありければ、よしや中々、取とゝむる人もなけ
れば、心のまゝに、いかなるふちせにも、身をなげんと」
(二十六ウ)

〔挿絵 第九図〕 (又二十六オ)

〔挿絵 第十図〕 (又二十六ウ)

おぼしめして、なく／＼、せうそくかきて、わらはにた
びける、是をかきりとは、よもしらじと、あはれ、はる
かに見送りて、立給ふ後にこそ、おもひ合けれ、あやし
き事共、有つる物をしらすりけるこそ、はかなけれ

わらは、御文を給はりて、急ぎ、山へたづねのぼりたれ
ば、りつし、わらはを打みるより、カ「さら」に、物をもいひ
えさりけり、たゞ、まづさめ／＼とぞ、なきける、なみ
た、をしのこひて、此あひだ、ありつる事共、かたらん
とすれば、まづ、御文を見候はんとて、おしひらきたる
に、あやしきさまの哥也」(二十七オ)

〔絵 第十六回〕

大津を過て、行処ニ、旅人、あまた行合て、あなあはれや、此兒、いかなる恨在か、身をなけ給らん、父母、師匠、いかに、なけかむすらむといふを、あやしと思て、委尋とへは、旅ひと、立とまりて、只今、勢多のはしを、渡候つる処ニ、年のほど、十六七に、見えさせ給候つる兒の、紅梅の小袖に、水干のしもはかり、めされて候つる西に向て念佛十へんはかりとなゑて身をなげさせ給つるかか○あまりにかなしく、見まいらせて候つる程に、我等やかて、水に入て、とりあげまいらせむと、し候つれとも、つゐに、みえさせ給候はぬ程に、ちからなく、過候也と語て、涙をはらくとそ、こほしける

我身さて、しづみもはてば、ふかきせの、そこまててらせ、やまのはの月

律師、あはて、是御らん候へ、御哥の心もとなく、見え候へば、何事をも、みちすがら、御物かたり候へ、まづ、いそぎ参らんとて、坂本より、わらはをさきにたてゝ、とる物もとりあへず、石山へぞ、はせて行ける

大津をすぎて、行ところに、旅人のあまた行合て、あなあはれや、此ちご、いか成うらみありてか、身をなげ給ふらん、父母、ししやう、いかに、なげき給はんずらんといふを、あやしと思ひて、くはしく、たづねければ、(二十七ウ)旅人、立とまりて、たゞ今、せたのはしを、わたり候つるところに、年のほど、十六七斗に、見えさせ給へるちこの、こうばいの小袖に、すいかんのしもばかり、めされて候つるが、西にむかひ、念佛十へんばかり、となへて、身をなげさせ給ひて候つる、あまりに、かなしく、見参らせ候つる程に、我ら、やがて、水に入て、とりあげ参らせんとし候つれ共、つゐに、みえさせ

〔繪 第十七回〕

旅人の、かたるを聞に、年の程、衣裳のさま、うたかふ所もなければ、律師も童も、心あきれ、手足もなへたるこゝ地して、たはれ臥ぬへき、思なれとも、馬をはやめて、橋つめに行て、見るに、若公の、いつも身をはなれて、懸給し、金欄のほそ緒のまふり、碧瑠璃の小念珠を取副て、橋の柱に、かけられたり

是をみて、律師も童も、おなしう身をしつめむと、もたへ、こかれけるを、同宿ともあまた、とりとめければ、無力、むなしき御首顔をなりとも、一目見て後こそ、ともかくも、ならめと思ひて、桂海は、つなき捨たる、海人の小舟に乗、淵のそこをのそみ見給、同宿中物共は、みなはたかになりて、岩のはさま、岸のかけまで、残さず、さかしけれども、かつて、みえ給はぬ程に、天にあほき、地に臥、なきさけふこと、なのめならず、道みちに時うつりて、供御の瀬と、いふところまで、求くたりたれば、せ

給ひ候はぬ程に、ちからなく、まかりすぎ候也とかたりて、なみだをはらくとそ、こほしける

旅人の、かたるをきゝて、年のほど、いしやうのやう、うた（二十八オ）かふ所はなかりければ、りつしも、わらはも、心あきれ、あし手もなへて、やがて、ふしぬべき心ちすれ共、馬をはやめて、はしつめに行て、みるに、わかきみの、いつも身をはなきで、かけ給ひし、きんらのほそをのまもりに、へきるりの小ねんしゆをそへて、はしのはしらに、かけられたり

是をみて、りつしも、わらはも、同しながれに、身をしづめんと、もたえこかれけるを、同宿共、とりとめければ、よしや、其むなしきからをなり共、一目見て後にこそ、ともかくも、ならめと思ひて、けいかいは、つなきすてたる、あま（二十八ウ）をふねにのりて、ふちのそこを、のぞき見けり、同宿中のもの共は、みなはたかに成て、いわのはざまか、きしのかけまで、のこる所なく、さがしけれ共、かつて、みえ給はねば、天にあふき、地

かれてとまる、もみち葉の、紅ふかき色かと見えて、岩
 かけに、なかれかゝりたる物の有を、船さしよせて、み
 たれは、在もむなしき貞にて、たけなるかみ、なかれ藻
 に、みたれかゝりて、岩こす波に、ゆられるたり
 泣々取あけて、律師は、顔をひさにかきのせ、童、御足
 を、ふところにいたきて、うたてしの御ありさまや、我
 等をは、いかになれとて、かゝる御ことは、ありけるそ
 や、梵天帝尺、天神地祇、只我等か命をめされて、今一
 目、空からぬ御かたちを、みせ給へと、音をおします、
 なきかなしめ共、落花、枝を辞て、二たひさく習なく、
 残月、西に傾て、また中空に、帰ることなければ、ぬれ
 て色こき紅梅の、しほくとしたる下に、雪のごとくな
 る、胸のあたりも、ひへはてぬ、乱てのこる、黛の色、
 こほれてかゝりし、緑のかみわりなき貞はかはらねともありし眼ありし眼ふさかりふさかり、一た
 ひ笑は、百の媚ありし眼ふさかり色変しぬれは、律師も童も、跡まくら
 に、ひれ臥て、絶入はかりに、泣しつむ、同宿下法師共
 にいたるまで、あたりの苔に、ふしまるひて、泣こゑさ

にふして、なきかなしむ事、なのめならず、はるかに、
 時うつりて、ぐごのせと、いふ所まで、もとめ下りけれ
 ば、せかれてとまる、もみちばの、くれなるふかき色か
 とみえて、いわのかげに、ながれかゝりたる物のありけ
 るを、ふねさしよせて、よくみれば、あるもむなしきか
 たちにて、たけなるかみ、ながれもに、みだれかゝりて、
 いわこすなみに、「(三十九才)ゆられるたり、なくく、
 取上奉て、律師は、かほを、ひざの上にかきのせ、わら
 は、あしを、いだきて、うたてしカの御有様や、我らを
 ば、いかになりと、おほしめして、かゝる事をば、おほ
 しめし立けるぞや、ぼんでんマ、たいしやく、天神地祇ちぎ、
 たゞ、我らがいのちをめされて、今一目、むなしからぬ
 御かたちを、みせさせ給へと、こゑもおします、なきさ
 けべ共、落花、えたをじして、ふたたび、さくならひな
 く、さんげつ、西にかたふきて、又中空に、帰事なけれ
 は、ぬれて色こき、こうばいの、しほくとしたるに、
 雪のごとくなる、むねのあたりも、「(二十九ウ)ひえはて

らに、やむ時なし

其日一日は、若やと、肌胸をあてゝ、あたゝめけれとも、つゐに、かなはさりければ、翌の夜、ちかき山の、とり辺野にて、一片の烟煙となしたてまつる、同宿中物共は、烟つきて後、皆帰とも、律師と童とは、帰らず、一堆の灰に向て、三日まで、泣ゐたりけるか、同苔にも、うつもれはやと、思けれとも、今はのきはに、送給し哥に、底まて照、山のはの月、と在しは、なからむ跡を、とふらへとのためにてこそ在と、思ければ、律師、山へ帰らず、こゝより、やかて、こきすみ染に、身をやつし、其遺骨を頸に懸て、山川を斗簍しけるか、後には、西山岩蔵といふ所に、菴室を結、かの後生菩提をとほらひ、童も、やかて、髪おろし、高野山にとち籠、つゐに、山中をは出さりけり

〔絵 第十八回〕

ぬ、みだれて残る、まゆずみの色、こぼれてかゝりし、みとりのかみ、わりなきかほばせは、かはらねと、一たび多めば、百ものこび有しも、まなこふさがり、色へんじて、ありしにもぬ御ありさまを、みたてまつるに、律師も、わらはも、共にひれふして、たへ入ばかりに、なきしづむ、同宿下法師にいたるまで、ふしまろびて、なくこゑ、さらにやむ時なし

りつしも、はらはも、たびくきえ入ぬ、同宿共、さまざま、たすけおこしなとして、律師の手を、とらへて、生うじや者ひつめつ、多しやじやうりは、世のならひにて候物を（三十才）といひて、なぐさめ、けうけしければ、少、心をとりなをして、人心は出来にけり

其日一日は、もしやと、むねにむねをあてゝ、あたゝめけれ共、つゐに、かなはさりけり、其辺、ちかき寺にて、一へんのけふりとなし奉りて、同宿中者共は、けふりつきて後、みなかへれ共、律師とはらはとは、かへらず、一すいのはいに、むかひて、三日まで、なきゐたりける

が、同じこけにも、むもれはやとは、思ひけれ共、今はのきわに、をくり給ひし哥に、そこまでてらせ、山の月の月、と有しは、なからん跡を、とふらへとのためにてこそありと、」(三十ウ)思ひければ、律師、山へも帰らず、やがて、其ゆいこつを、くびにかけて、山河をとそうしけるが、後には、西山のいはくらといふ所に、あんじつをむすびて、ごしやうぼだひを、とふらひ奉る、わらはも、かみをきり、法師に成て、かうやさんに、とちこもり、つるに、山中をいでざりけり

其後、園城寺の、三摩耶戒壇の、張本の衆徒卅人、今は^立帰て、住寺すへき様もなかりければ、世中、あちきなく覚て、皆離山せんとしけるか、今一度、寺門の焼跡に^立帰、内證甚深の、法施をも奉て、発心修行の暇をも、申はやと思ひて、皆新羅大明神の御前に、通夜して、今をかきりの、法味をそ捧ける

夜いたくふけて後、夢うつゝの、さかひもしらぬに、東方の虚空より、馬を馳、車を轟音して、おひたゝしき、

其後、おんじやうじの、三まやかいだんの、ちやうぼんの^カゆと、三十人、今は立かへりて、住寺すべきやうもなければ、世中、あぢきなくおほえて、みな、りさんせんとしけるが、今一度、寺門のやけあとに、立かへり、ないせう」(三十一オ)ぢんしんの、ほつせをも奉り、ほつしんしゆぎやうの、いとまをも、申さばやと思ひて、みな、しん羅大明神の御まへに、つ^カうやして、こよひをかぎりの、ほうみをぞ、さゝげける

大人高客の、来勢在、あやしや、誰なるらんと、目もかれず、是をみれば、或は、法務の大僧正にやと、みえたる高僧、四方輿に乗、扈従の大衆、前後にかこみ、或は衣冠たゞしき俗躰の客、甲冑を帯せる、随兵を召具、或は、玉のかんさしをかたふけたる夫人、輕軒に乗て、侍女数十人、左右に相順へり、跡にさかりたる、退紅の仕丁に、是は、いかなる人にて、御渡候そと、問は、是こそ

東坂本に御座候、日吉山王にて、御渡候へとそ答ける

此高客、皆、輿車より落^降、幔の内へ入給へは、新羅大明神、玉冠をたゞしふし、威儀を刷て、垂帳内より、出向はせ給、賓主座定て後、献酌の例在、舞曲の宴在、新羅大明神、誠に、興に和して、歡喜の笑を含給ふ、終夜、遊宴歡娛して、明けぬれば、山王還幸なるに、明神寺門の外まで、送奉て、とゞまらせ給ぬ

大明神、玉橋を步て、社壇へ、入せ給はんとする時、通夜の大衆一人、明神の御前に、ひさまつき、涙をなかし、申けるは、三摩耶戒壇建立の事は、己往の勅許に任

夜ふけて後、夢うつゝの、さかひもしらぬに、とう方のこくうより、馬をはせ、車をとゞるかす、をとして、おびたゞしき、大人かうきやくの、来るせいあり、恠^{あや}しや、たれなるらんと、めもあやに、是をみれば、あるひは、ほうむの大そうしやうにやと、見えたるかうそう、四方ごしののりて、こせうの大しゆ、ぜんごにかこみ、あるひは、いくはんだゞしき」(三十一ウ)

〔挿絵 第十一図〕 (又三十一オ)

〔挿絵 第十二図〕 (又三十一ウ)

そくたいのきやく、かつちうをたいせる、ずいびやうをめぐし、あるひは、玉のかんさしをかたふけたる夫人、けいけんにのりて、侍女^{じじよ}数十人、さ^カうに相したがへり、跡にさがりたる、退紅の仕丁に、是は、いかなる人にて、御わたり候ぞと、とへば、是こそ、ひがしさかもとに、おはしまし候、ひよしさんわうにて、御わたり候とそ、こたへける

此かうきやく、みな、こし車よりおりて、まんの内へ、

せ、我寺の興隆を存して、興行仕しことにて候へは、一塵も、衆徒のひかことゝは、存候はず、然を、山門漫に、度々の勅裁を背、種々の魔障を成て、当寺を焼払候つれば、神明仏陀も、さこそ御心を、悩させ給候らめとこそ、存候に、当寺敵対の、山門擁護の神、日吉山王に対して、宴をまうけ、興をつくして、遊戯させ給候は、如何なる神慮にて候やらん、難測こそ、存候へと申せは、大明神、通夜の大衆を、皆、御前へめされて、衆徒の恨申所、一往其謂在ニ似と云とも、是は皆、一愚の管見也、夫、神明仏陀の、利生方便を垂日、かれを是として、福を与も、真実の本意にはあらず、是を非して、罰を行も、慈悲の至也、只順逆の二縁をもて、遂ニ無上菩提ニ趣しめんか為也、我喜ことを、人未^可知、仏閣僧房の焼たるは、造営するに、財施の利益在、経論聖教の焼ぬるは、これを書に、伝写の結縁あり、有為の報仏、豈生滅の相無むや、只、此乱によて、今桂海か発心して、若干の化導を、いたすことのうれしさに、歓喜の心をは、露つる也、山王

入給へは、しん羅大明神、玉のかふりを、たゞしく、いぎをかいつくろひて、金ちやうの内より、出むかはせ給ふ、賓主座さだまつて後、けんしやくの礼あり、」(三十ニオ) ぶきよくのえんあり、しん羅大明神、まことに、けうにくわして、くはんきのゑみを、ふくみたまふ、よもすがら、ゆうえん、くわんこして、あけぬれば、山王くはんぎよなる、明神、寺門のほかまで、をくり奉て、とまらせ給ひぬ
大明神、玉のきざはしをあゆみて、しやだんへ、入せ給はんとする時、つうやの大しゆ一人、明神の御まへに、ひざまづき、なみだをながして、申けるは、三まやかいだん、こんりうの事、いわうの、ちよくきよにまかせて、我寺のこうりうを存て、こうぎやう仕りし」(三十二ウ)
事にて候へは、一ちんも、しゆとのひか事とは、存候はず、しかるを、山門、みだりがはしく、度々、ちよくさいを、そむくのみならず、しゆくくのさまたけをなして、たうじをやきはらひ候つれば、神明ぶつだも、さこそ御

も、是を賀給はんために、來給へり、石山の觀音の童男
變化の得度、誠ニ有難き、大慈大悲哉と、仰られて、明
神垂帳の内へ、入らせ給ふと、覺れは、通夜の大衆三十
人、一時に、皆夢さめて、同さまにぞ、語ける

〔繪 第十九圖〕

心を、なやまされ候らめとこそ、存候しに、たうじ、て
きたいの、山門おうごの神、日吉さんわうにたいして、
宴をもよほし、けうをつくして、あそびたはふれさせ給
ひ候は、いかなる、しんりよにて候やらん、はかりがた
くこそ、存候へと申せば、大明神、つうやの大しゆを、
みな、御」(三十三才)まへゝめして、しゆと、うらみ申
のところ、一わう、其いはれあるに、にたりとも、是は
みな、一へんのくるしみ也、それ神明ぶつだの、利しや
う方べんを、めぐらす日、かれを是して、福をあたふる
も、しんじつの本意にはあらず、これを非して、ばつを
おこなふも、じひのいたり也、たゞ、じゆんぎやくの、
二つのえんをもつて、つるに、むじやうぼたひに、おも
むかしめんためなれば、わがよろこぶ所を、人いまたし
るべからず、ぶつかく、そうばうの、やけたるは、ざう
ゑいするに、ざいせの利やくある、きやうろん、しやう」
(三十三ウ)けうの、やけぬるは、是を書に、でんしやの
けちえんあり、有為のほうぶつ、あにしやうめつのさう

なからんや、たゞ、此らんによつて、けいかい、ほつし
んして、そくばくの化導けだうを、いたさんする事のうれしさ
に、くはんきの心を、あらはしつるなり、山王も、是を
賀かし給はんために、来たまへり、石山のくはんおんの、
どうなんにへんげマ、とくど、まことに、ありかだきマ、大
じ大ひかなと、仰られて、御みちやうの内へ、明神、入せ
給ふと、おほえて、つうやの大しゆ、三十人、一時じに、
ゆめさめて、みな同し」(三十四オ)やうにぞ、かたりけ
る

さては、若公の身をなげ給しも、観音の変化なり、寺門の
焼けるも、濟度の方便也けりと、信心、肝に銘しければ、
三十人の衆徒、おなしく皆発心して、共に、仏道を修せ
んとて、彼桂海か、瞻西上人と名を易て、すみ給、岩蔵
の庵室へ、尋ね行て見は、三間の茅屋、半を内に分て、
三秋の霜の後、敗荷衣うすく、一朝の風の前に、落菓食
ともしからず、松吹嵐、溪の声、うき世の夢の、さめく
と、無人をとふたひことに、袖なる月も、ぬるゝかほな

さては、わか君、身をなげ給ひしも、くわんおんのへん
げ也、寺門のやけたるも、さいどのはうべん也けりと、
しんぐ、きもにめいじければ、二十人のしゆと、同じ
く、ほつしんして、共に、仏道をしゆせんとして、かのけ
いかいが、せんせい上人と、名をかへて、住給ふ、いわ
くらのあんじつへ、たつね行てみれば、三間四めんのば
うおく、半を雲に分て、三秋しゆのしもの後、やぶれ荷衣かゐう
すく、一朝ちゆうの風のまへに、おつくわマ、しよくともしから

れは

むかし見し、月の光を、しるへにて、こよひや君か、
にしへ行らむ

書院の石壁に、書付けるを、君、かきりなく叡感在て、
新古今の尺教の部に、撰入させ給ふ

徳不孤、必有隣事なれば、いとふとすれと、同さまなる
桑門の人、那辺アタコナタ這辺コナタより、来集せしかは、都ちかき所に、

寺を建て、人をも広、利益せんとて、東山、雲居寺といふ

御堂を、建立して、年々の春ことに、三尊来迎の儀式を、
取行給、廿五菩薩の妓楽歌詠して、往生人を、迎たまふ

さま、みる人、信心をおこさすと云こと無しかは、遠近
踵を継て、此ニ参詣し、貴賤掌を合て、是を敬礼す

仏種、縁より起るとは、かゝることをそ申へきと語て、
涙をなかせは、聞人共に、感歎して、袖をぬらさぬはな
かりけり」

〔絵 第二十図〕

「下巻終

ず、松ふくあらし、たにの」(三十四ウ)こゑ、うき世の
夢の、さめくと、なき人をとふたびことに、袖なる露
も、ぬるゝがほなれば

むかしみし、月のひかりを、しるべにて、こよひや君
か、にしへ行らむ

と、しよゐんのかべに、書付ければ、君、かぎりなく、
ゑいかんありて、新古今しんこきんの尺教ぶの部に、せんじ入させ給
ひける

徳ひとりならず、必憐事マありければ、いとふとすれと、

同じさまなる、桑門の人、しよ方カより来りあつまりしか
ば、みやこ近き所に、寺を立て、人をもひろく、りやく

せんとて、ひがし山に、うんこじと」(三十五オ)いふ、
みたらうをこんりうして、年々の春ごとに、三ぞん来迎らいかうの儀ぎ

式しきを、とりおこなひ給ふ、二十五のぼさつのぎかく歌詠
して、往生わうじやうの人をむかへ給ふ様、みな人、しんぐくをお

こさずといふ事なかりしかは、遠近えんきん、くびすをついで、
爰に、来詣らいけいし、きせん、たなこゝろを合て、是を敬礼けいらいす

仏種、ゑんよりおこるとは、かゝる事をぞ申べきと、かたりて、なみだをながしければ、きく人共に、かんたんして、袖をぬらさぬはなかりけり」(三十五ウ)

稜

此物語はもと玄恵法師の述作にて一部全躰は神祇釈／教恋無常哀傷の極致是瞻西上人の一生の徳を感じ／彼法印の骨髓をあらはせし甚深の物と也最心をとゝめ／始終を味ひ見るへしされとも古来の板行所々違ひ有故に／此度本書の写しをもつて改め侍るとそ書林子に稜を／こふ固辞するに不許よつて右の意趣をあらはにすと爾云／

応々翁

正徳六丙申年正月吉日

方山書(黒印)

江戸日本橋南壱丁目 須原屋茂兵衛開

洛陽京極通五条上ル町 新井弥兵衛版

下巻終

秋夜長物語 〔室町後期〕 絵巻

細川家永青文庫蔵

それ、春の花の、樹頭にのほるは、上求菩提のきをすゝめ、秋の月の、水底にくたるは、下化衆生の、相をあらはす、天物いふ事なくして、物にみな、あらはしめす、こゝろ有て、つとめさらむや、もし、人ありて、人間の八苦をみて、穢土をいとふときは、生死即涅槃となる、まことに、諸仏薩垂の、順逆の化道をたるゝ日、つみあるをは、邪より正にいれ、縁なきをは、悪より善にいさなひたまふ、なにを以、いふとならば、経論の諸説、諸文にのするところは、事しけゝれば、ちかき比、みゝにふれしことの、余にあはれまし、又貴かりしかは、面々に、まくらをそはたてさせたまひ、老のねさめに、秋の夜の長物かたり、申侍らむ

後堀河院の御宇、西山の瞻西上人ときこえて、道学兼備したりし人、もとは、北嶺東塔の衆徒、勸学院の宰相の律師桂海と云ふ人にそ、おはしき、内には、くわうせきか、あとをふむて、のうしや清涼の風を、あけたり、ある時は、忍辱の衣の、やいはに、忿怒の勇鋭を、ふるふ、まことに、真俗の倚頼、文武に達したる人なり

こゝに、壮年の比、花ちり、春の暮をみて、ねぬ夜の夢や、覚たりけむ、こはそも、何事そや、たまぐ、俗塵の境界を、はなれて、釈氏の門室に、入なから、あけくれば、名聞利養にのみ趣て、出離生死のつとめに、をこたりぬる事、あさましきよと、おもふ心の、出きにければ、やかて、山の奥をも尋、柴の庵りの、しはしはかりの、かくれかをも、むすはゝやと、おもひけるか、久縁のつなく所をは、人ことに、はなれかたく、醫王山王の結縁も、すてかたく、同朋とうしゆくの別も、さすか名残おしくて、心はかりあらまして、いたつらに、月日をそ送りける

其心、ことはのほか、あらはれけるにや

朝々暮々風塵底 失脚誤生三十年

何日人間榮辱眼 古松陰裏看雲眠

是程に、おもひ立ぬることの、かなはぬは、邪魔外道の、我をさまたくるにや、さらは、仏神の擁護をたのみ、此願を成就せんと思て、いし山の観音にまふて、一七ケ日の間、道心堅固速證無上菩提とそ、祈られける七日に満する夜の夢に、錦帳の内より、容顔美麗なる児の、いふはかりなく、あてやかなるか、たち出、ちりまかひたる、花の木かけに、立やすらひたれば、青葉かちに、ぬいものしたる水干の、遠山桜に、花二たひ、さけるかと、うたかはれて、雪のことくに、ふりかゝりたるを、袖につゝみなから、いつちへゆくとも、おほえず、暮行けしきに、きえさりぬと覚えて、夢は則さめにけり

〔絵 第一図〕

是既、諸願成就の、夢想なりと、おもひて、またしのゝめの、あけはてぬに、たちかへりぬ、外より、来へき人を待やうに、今や道心発と、まち居たれば、山ふかく、すまはやと、おもひし心は、うち忘て、夢にみえつる、児の面かけ、時の間も、身をはなれず、それも誠の、うつゝならねは、せんかたなき面影に、たえかねて、さてもや、若、なくさむと、一爐の香を、たきて、仏前にむかへは、漢の李夫人か、けふりにうかひし面影に、身をこかしたまひし、武帝の御おもひも、身にしられて、空山の花を、なかめて、雲底によれば、巫山の神女、くもとなり、雨となりし、夢のゝちの、おもかけに、たつきもしらす、歎けむ、かんわうの御涙も、よそならず

山王の御神託に、我一人の衆徒を、うしなへは、三尺のつるきを、さかさまに、のむかことしと、かなしみたまひければ、わか離山を、山王のおしみおほしめして、道心を、さまたけさせたまふにや、たとひ、さやうの神慮なりとも、命有てこそ、法燈頼風（フタ）に、むかふをも、かゝけむ、暮まつ程の、露の身も、あらしと、いまはおもひければ、石山の観音をこそ、かこち申さめと、おもひて、又いしやまへそ、まふてける

三井寺の前を、すきけるに、ふるともしらぬ春雨の、かほに、はらくと、かゝりければ、しはらく、はれまを、またむと思て、金堂の方へ、ゆく処に、聖護院の御坊の庭に、老木のはな、色ことなるか、こすゑ、かきにあまりて、雲をしけるかと、おほえてけり、遙に人家をみて、花あれば、則いる、といふ詩のころに、ひかれて、門のかたはらに、立よりたれば、よはひ、二八はかりなる児の、水魚紗の水旱に、うすくれなひの、あこめかさねにて、腰のまはり、ほそやかに、けまはしふかく、たをやかなるか、みる人有とも、しらてや侍りけむ、御すのうちより、庭に立いて、雪をもけに、さきたる花を、一ふさ手折て

ふるあめに、ぬるともおらむ、やまさくら、雲のかへしの、かせもこそふけ

となかめて、花のしづくに、たちぬれたる躰、これも花かと、うたかはれ、さそふ風もやあらむと、しつころなければ、（ふ脱カ）を（フ）はかりの袖もかなと、雲にも、かすみにも、おしむへき心ちなむしける、ころなく、かせ、門の戸ひらを、きりくと、吹ならしたるに、あくる人有りやと、あやしげに、見やりて、花を手に持ながら、懸のもとを、あゆみたまふ、ふさのことくに、ゆらくと、かゝりたるかみの、青柳の糸に、うちまとひて、引とめたるを、ほれくと、見かへりたる、目つき、顔のほひ、いふはかりなきさま、ゆく末なく、われを、まよはしつる、夢のたちち、すこしもたかはねは、いまのうつゝに、みし夜の夢は、うちわすれて、日くれけれども、行へき方もおほえず、

その夜は、金堂のゑんに、ひれふして、夜もすから、なかめわひぬ

これや夢、ありしやうつゝ、わきかねつ、いつれにまよふ、こゝろなるらむ

〔絵 第二回〕

夜あけゝれば、又、昨日のところに行て、御坊のかたはらに、徘徊したるに、童のいときよけなるか、ぬきすのしたなる、水すてむとて、門の外に出たり、これやもし、児の御事、しるらむとて、立よりつゝ、物申さむと、いへは、ことの外なるけしきもなし

律師、うれしとおもひて、昨日、此院家に、水魚紗の水早めされて候、としのほと、十六七はかりに、みえさせたまふ、少人の御ことや、しらせたまふと、問へは、童、うちゑみて、我身こそ、この御坊に、朝夕、めしつかはるゝ物にて候、御名をは、梅若公と申て、御里は、花園の左大臣と申て、三条院の御跡とやら覽ことなき、御事にて、御わたり候、御こゝろわくかたもなく、偽のある世とたに、おほしめされぬ程の、はかなき、御心あてにて候へは、一寺の老僧、若輩、春にさき立、一木の花をみて、よそにちる、こゝろもなく、仲秋の月、我家のひかりを、あらそふなる風情にて、御所の御様、ゆるす方なく、御渡候程に、詩歌管絃の座席ならては、御出も候はず、何となく、ふかき窓にむかひて、詩をつくり、哥をよみて、なをさりに、月日を、送りましたまふとそ、かたりける

聞に付ても、いとゝ、心もうかれぬれば、やかて、此童をたよりにて、こゝろの奥を、しらせはやと思へとも、あまりにひたけたらんも、さすかなりければ、石山へ参て、我山へそ、かへりける

〔絵 第三回〕

律師は、夢とうつゝとの面影に、おきもせず、ねもせて、夜をあかし、日を暮しけるか、聖護院のかたはらに、むかししりたる人の、ありけるを、たつね出して、あるときは、詩歌の会に、ことよせ、ある時は、酒宴に興したる躰にて、一夜二夜をあかす事、たひくくに、なりにけり

其後、さきの童に、かたらひより、茶をのみ、酒をたゞへて、あそひける次に、梅若公に、思ひまよへる、心のやみ、いつはれへしとも、おほえぬよしを、かたりければ、童は、先、文を給候へ、申て見候はむとそ、いひける
おもふこゝろを、つくすほと言葉、ありかたければ、歌はかりにて

しらせはや、ほのみしはなの、おもかけに、たちそふ雲の、かゝるまよひを

〔絵 第四回〕

童、ふみを、ふところより、とり出し、是御覽候へ、いつそや、雨のゆふへの、花の木かけに、立ぬれて、御わたり候ける、袖のけしき、はやくれなるの、ふりいてゝ、泣はかりに、つゝみかねたる様に、みえ候と、申は、若公は、かほうちあかめて、文のひもを、とかむとしたまふ処に、出世者、なにかしの僧都と哉らん、わたり殿、板ふみならし、内へいるに、此ふみを見せしと、袖の中に、かくしたまふ、わらは、たより有と、隙をまちて、日暮るまで、祇候したるに、しはらくありて、書院の窓より、返事あそははして、出したまふ、童、とる手もかるく、うれしく思ひて、いそぎ行たるに、律師、めもはやに悦て、まことに、身もあられぬ、さまなり、ひらきてみれば、これも、言葉はなくて

たのますよ、人のこゝろの、はなの色に、あたなる雲の、かゝるまよひを

〔絵 第五回〕

律師、この返事を見て、こゝろ、いとゝうかれしかは、さらに、たち帰るへき、こゝちもなく、あひみぬさきに、別もせんかたなく、おほえしかは、しはらく有て、よそなからの音信をも、きかまほしくは、おもへ共、童に、いとまこひて、山へ帰りけるか、一足あゆみては、見かへり、二足あゆみては、立かへりける程に、春の日、なかしといへとも、ほとちかき、坂本の坊までも、行つかて、日くれにければ、戸津の辺にそ、在りにける、はにふの小屋に、とまりけり

夜もすから、おもひあかして、朝になれば、山へのほらむとて、立出たれば、ち引の繩を、腰に付たらんかことくに、我ならぬこゝろに、ひかれければ、戸津より、又引かへして、大津のかたへそ、あくかれける

雨しめやかに、降ければ、簑かさ、うちきて、旅人の形に、身をやつして、行ところに、からかささしたる、騎馬、みちにて、行あひぬ、誰なるらむと、見やりたれば、彼童にてそ、ありける

童、律師をみて、ふしきや、申へき事ありて、しらぬ山までも、尋まいらんと、しつるところに、うれ敷も、参あひたるものかなとて、馬よりとむており、律師の手をとりて、傍なる堂へ立寄て、さて、何事にやと、問へは、童、ふところより、色ことに、こかれたる文の、ふる袖まで、匂ひたるを、取出して、いかなる山の、おくなりとも、聞しはかりを、しるへにて、尋まいれと候し、けしからぬ、御心まよひや、まして、一夜の後の御袖の露、さこそ候はんと、うちゑみて、律師も、せめて、別を歎かむ事にて候はゝやと、たはふれ、みれば

いつわりの、ある世をしらて、たのみける、わかこゝろさへ、うらめしの身や

〔絵 第六回〕

さて、童、申けるは、御所のかたはらに、衆徒の坊の候へは、それに、しはらく、御座候て、玉すたれの際をも、御こゝろかけ候へと、しきりに、いさなへは、思方に、心ひかれて、律師、又三井寺に行ぬ

童、しはしか程の、宿かりて、ある坊の学問所に、をきたれは、其坊のあるし、懇なるさまなり、常に児など、あまた出して、管絃をし、ほうへんの哥合などして、日を送りける

律師は、諸願の事ありとて、新羅大明神に、七日参詣のよしをいひて、夜るになれば、院家の傍に、立めぐり、築山の松の木かけ、せん載まの草の露に、かくれるたるに、若公も、はや、心得たるけしきにて、人目の隙もかなと、求るさまなれ共、かなはて、出かねたる心つくしを、見も、中く、いたはしければ、明日は、山へ帰らむと、思ける処に、童、来申けるは、今夜は、御所へ、京より客人、御入候て、酒宴にて候程に、門主も、いたくよはせ給て候へは、忍やかに、御入候へしと、おほせつるに、門さゝて、御待候へと、いそかしけに、いひすてよそ、帰りける

律師は、これをきくより、心うかれ、魂みたれて、いつくにある、我身とも、覚えす、ふけゆく鐘の、つくくと、月の南に、めくるに、をとすれば、書院のすき障子より、見出したるに、童さきに立て、魚なうのとうろに、螢を入、其影、かすかなるに、若公、金紗の水旱な、うちしほれたる躰にて、人もみるやと、かゝりのもとに、立やすらひたれば、みたれてかゝる青柳の、いと云はかりなく、みえたるに、律師、いつしか、心ほれくとなりて、あるもあらぬさまなり

童、先うちへ入て、ほたるをは、軒にかけ、書院の戸を、ほとくと、たきて、これに、御わたり候やらんと、案内すれば、言へき様なくして、かたはらに、身をそはむる、けしき斗あるよしを、しらせたり

童、庭に帰て、早と申は、若公、さきに立、妻戸より、内へ入ぬ、さしも、窓をならす、その袖のうつりかも、身にふるゝはかり、寄そひて、うちかたふきたれば、嬋娟たる、秋のせみの、はつもとゆひ、宛転たる、蛾眉の黛のほひ、花にもねたまれ、月にもそねまれぬへき、もゝのかほはせ、ちゝの媚、ゑに書とも、筆も及かたく、語に言葉もなかるへし

涙と共に、むすほゝれて、こゝろのしたひも、うちとけて、ゆくすゑまでの、むつことも、またつきさるに、しのゝ小篠の一ふしに、あけぬとつくる、鳥のねも、うらめしく、たちわかれなむとするに、あけかたの月、窓のにしより、くまなく、さし入たれば、ねみたれかみの、はらくと、かゝりたるはつれより、眉の匂ひ、ほげやかに、見えたるさま、又あふまでを待ほと、命もあるへしとも、おほえす

〔絵 第七図〕

さて、律師、わか君を送りたてまつりて、暁いてたるまゝにて、内へも入らす、門のからいしきに、立たるところに、童、文とて、さし出したるを、みれば

わか袖に、やとしやはてん、きぬくの、なみたにわけし、有あけの月

律師、書院にかへりて

ともにみし、月を名残の、そでの露、はらはていく夜、なけきあかさむ

〔絵 第八回〕

律師は、夢とたに、おもひも分さりつる面影を、身にそへ、ふれつる袖の、うつりかを、己かきぬく、ひやゝかに、思しこゝろに、立別、心しほれて、世のこと、人の物云、返事をもせず、なみた、人めにあまりて、おさふる袖も、朽ぬへき、されは、いたはる事有と、披露して、対面もせず、伏しつみて、日を送りける

童、このよし伝きゝて、若公に、かくと申ければ、わかきみも、まことに、こゝろくるしき事に思、けしき常より、打しほれ給て、今もや、音信ありと、しはらくは、心に待たまひけり

余に、日かす経にければ、童をめて、仰けるは、さても、ありし夜の、夢のたゝちも、うつゝなく、おとろかす、たよりもなく、ほと遙なるを、誰方のつらさになして、そのまゝ、遠さかりはつへき、又、風のこゝちとやらむ、聞しは、露の命も、いかゝ成ぬらん、もしも、はかなくなりなは、無跡は問ても、其かひなし、又いかなる山の奥なりとも、尋行はやと、おもへ共、申置ことなくて、まかり出なは、門主の御意、いかゝとおもはれて、それもかなはず、ゆくゑもしらぬ、あた人の、たゝいひすてし言葉を、まことになして、われにこゝろを付しも、たかせしわさそや、今の程に、我しるへして、いかなる山の奥、いつくの浦なりとも、尋行と、かこちたまひて、涙をはらくと、こほしたまふ

さすかに、いまた、いとけなき、あたし心にて、又もなく、思つきぬる、ならひなれは、けにも、ことはりにやと、童おもひしりて、其人の在所をは、委、うけ給て候、御供申候はむとて、若公と、童と、たゝ二人、行へき方もしらす、立出ぬ

若きみは、もとより、三たいくわうしよの、家にむまれて、泥土をもふみたまはねは、歩かねたまへり、御手を引ける童さへ、あゆみかねければ、思やう、いかなる天狗、はげ物なりとも、我等をとりて、比叡山へ、のほせよかしとおもひて、木すゑの月に、心をすまして、からさきの松かけに、やすみ居たる処に、歳たけたる山伏、四方輿にのりて、いつかたへ、御渡候やらむと、問へは、童、ありのまゝに、こたへけり

山伏、いそき輿より飛ており、我こそ、御尋の御坊のとなりへ、参者にて候、あまりにいたはしく、見まいらせ候へは、我らはかちにて、歩候はむ、この輿、めされ候へとて、兒と童と、かきのせて、力者十二人、前後に、はしりちりて、鳥のとふかことくにぞ、行ける

〔絵 第九図〕

さて、大峯の釈迦の嶽へそ、かきもちてくる、こゝにて、磐石をたゝみたる、ろうの内に、おしこめて、をきたれば、よるひるの、さかひもしらす、月日の光をも見す、なくより外の、事そなき

さて、夜より、若公、うせたまひぬる事、たゝことならず、門主の御なげき、寺中のさわき、申はかりもなし、さて、御尋ありけれ共、しる人、さらになかりけり

東坂本より、大津へ通、たひ人行あひて、さやうの人は、亥刻はかりに、からさきの、松の下にて、見奉り候しと、語ける、さては、この間、忍て、いひかよはず人、山にありと、きゝつるか、かどひけるとて、院家の主上は、申におよはず、一寺の衆徒、なゝめならず、さわきける

父の大臣も、知たまはぬ事、よもあらし、先、花蘭の亭へ、をしよせて、うらみ申さむとて、御門徒の大衆、五百余

人、三条京極へ、とりかけたるに、近習五十余人、身命をかるしめ、たゞかふといへとも、大衆、事ともせず、責入
けり、わた殿、つり殿、藁をならへし玉の欄干、一うものこらす、焼はらふ

(絵 第十図)

園城寺の衆徒、是にも猶、無念さむせず、一山一同に、僉議しけるは、寺門の恥辱、これに過たる事、あるへからず、
所詮、以此次、当寺に、三摩耶戒壇をたては、山門、定、よせすらん、是則、敵をほろほすなかたち、又、衆生をし
りそくる、戒法をひろむる、みちたるへし、天こゝに、時をあたへたり、しはらくも、遅々^マすへからずとて、一味同
心の衆徒、二千余人、如意寺越のみちを、所々、ほりきり、寺中を城廓にかまへて、やかて、戒壇をそ、立たりける

上巻終

[絵 第十一図]

山門、是を聞しかは、ほつきせさらん、戒壇の事に依て、園城寺へ発向する事、以前既六ヶ度なり、公家に奏し、武
家に訴までも、あるへからず、時をかへす、をしよせて、やきはらへとて、末寺末社、三千七百余ヶ所、一ふれ送る、
先近国の勢共、馳あつまりて、山坂本に、充滿せり

十月二十五日、中の申にあたり、是にます、吉日あるへからずとて、十万騎の勢を、七手に分て、押よする、或は
平くたる、志賀からさきの浜路に、駒にむち打、衆徒もあり、或は、漫々たる煙波、湖水の、舟にさほさす、大衆
も有り、思々に、よせける、その中に、桂海律師、申けるは、此みたれ、併、我身よりこと発殃なれば、人よりさき

に、一合戦して、名を後記に、とゞめむと思ければ、すくりたる、同宿若黨、五百余人、神水をのみて、五更の天のあけぬまに、如意寺越をそ、よせたりける

大手、からめて、城内、すへて十万七千余人、一味同心に、ときの声をあげたれば、太山も、これかたにくつれ、湖水も、これかたにくたふきて、水輪際に落かと、うたかはれ、手負死人をもちはず、乗越々々、せめ入ぬ

よせてには、本院に、習禪、禪智、円宗院、杉生、金輪院、杉本、山本、妙観院、西塔には、常喜、乘実、行泉、行住、上林坊、横川には、善法、善住、般若院

是を先途と、ふせきたゝかふ、園城寺の大衆に、円満院の鬼駿河、唐院の七天狗、南院の八金剛、千人きりの荒讃岐、かなさいはうの悪大夫、八方破の武蔵坊、三町つふての円月坊、さけきりこのみの覚蔵房、此等、命を塵灰にかろくして、三時はかり、戦たり

よせて、七千余人、手を負て、半死半生に成ければ、この城、尽末来際をふるとも、落へしとは、見えさりける、桂海これを見て、ゆい甲斐なき人々の、合戦のしやうかな、いくほともなき、堀一、死人にて、むめたらんに、なとか攻落さてあるへき、我と思はん人々は、付て、桂海か手からの程を見よとて、あくまで、廣言して、やけんほりのそこせはなるなかへ、かはととひ入、二丈あまりに、みえける、きりきしの、屏はしらに、手うちかけて、ゆらくと、はね越て、敵三百余人か中へ、唯一人、みたれ入

さけきり、けさ切、車きり、将碁倒しの払切、いそうつなみのまくりきり、そはめてもとる一刀きり、もとりてすゝむをかみうち、らんもむ、ひしぬい、くもて、かくなは、十もんし、四かく八方、やつはなかたに、をひたてく、あしをもためず、切てまはるに、如意寺越をふせく者、三百余人、かなはしとや思けん、右往左往に、落て行

續てせめ入、桂海か手の者、五百余人、はしりちり、院々谷々に、火をかけたるに、魔風しきりに吹て、余炎四方におほひければ、金堂、講堂、鐘樓、経蔵、常行三昧阿弥陀堂、普賢行願如法堂、教待和尚御影堂、智證大師御影堂、三門跡の御坊に至まで、凡三千八百余ヶ所を、一時に、火炎となして、たゞ新羅大明神の社壇より外は、残坊もなかりけり

〔絵 第十二回〕

若公は、三井寺の、かやうに成ぬるをも、しらせたまはず、石の籠の内に、押こめられて、あけ暮、なきしつみて、おはしける処に、無量の天狗共、あつまりて、四方山の物かたりしける中に、ある小天狗の、申けるは、我等か面白しと、おもふ事は、せうまふ、颯、小さいかひ、るむのすまうの事出し、山門南都の御興ふり、五山の僧の門徒たて、此等そ、興ある見物出来して、一風情有りと、思へるに、昨日、三井寺の合戦は、よにたくひなき、見事哉と、申せは、又そはなる天狗の、いひけるは、いしき事、この梅若公を、とりまいらせすは、是程のいくさ、何ゆへにか出来へき、陣の最中に、寺の門主たちの、素絹の衣を著して、方々へ、にけさせたまひし、おかしさに、折句の哥を、よみたりとて

うかりける、はち三井寺の、ありさまや、かいつくりては、ねをのみそなく

諸の天狗、ゑつほに入てそ、咲ける、若公、是を聞たまひて、あなあさましや、さては、三井寺は、われ故に、ほろひけるにやと、思たまへとも、委、尋へき人なければ、唯、童と共に、なくより外の、事そなきかゝる処に、淡路の国より、八旬はかりなる老翁を、しはりて、籠の中へ入て、申けるは、此翁は、日てりの雨に、

雲のはつれより、ふみはつして、落て候を、とらへてまいらせ候、何とも名を御付候て、めしつかへ、虚空をかけり候へき事、たれにも、をとり候はしとぞ、申ける

〔絵 第十三回〕

一両日ありて、彼翁、児と童と、かなしむをみて、もし、御袖やぬれて候と、問へは、児も童も、いひけるは、すみなれし所を、かりそめなから、立別て、此天狗道に落ぬれば、父母の御なしみ、師匠の御なけき、思やらるゝ度ことに、涙せきあへす候へは、さこそ袖も、ぬれて候らめとぞ、こたへける

老翁、大によるこひて、若公の袖を、しほりてみるに、しら玉かなにそと、人のとふ斗に、涙の露、滴けり、翁、この露を、左の手に入て、しはらく、宛転するに、彼玉、ほとなく、鞠の勢になりぬ、是を又二にわけて、左右の手に入て、ゆるかしゐたるに、二の露、次第に、大になりて、石の籠、まんくたる、太水となりにける時、老翁、たちまちに、大龍となりて、雷鼓、地をうこかし、電光、天にひらめく、さしも義勢の天狗共、怖恐、十方にうせぬさて、龍神、いしの籠をけやふりて、児と童とのみならず、諸の者ともを、雲に乗て、大内の旧跡、神泉淵の辺に、

置けり、此者共、皆わかれて、己か古郷へ、帰りぬ

若公と、童と、我古郷をたつねて、花園へ行給ひたれば、葦をならへて、作しも、皆、焼野々原となりて、事問へき人もなし、あたりなる僧坊にて、事の様を尋れば、左大臣殿は、きんたちの若公、比叡山へ、うはゝれさせ給て候、御里にも、しろしめさぬ事は、候ましきとて、三井寺より寄て、焼はらひ候とぞ、語ける

〔絵 第十四図〕

大臣の御ゆくゑ、尋まいらせん程、立寄へき宿もなければ、さらば、三井寺に行て、門主の御事をも、尋申さむとて、三井寺へゆきて、見たまへは、仏閣僧坊、一字ものこらす、皆焼はらはれて、寒庭の草の露、空山の松風に吟す、是、我昔住にし、跡よとてみれば、いしすゑも、焼くたけ、苔のみとりも、色かはり、軒端の梅も、枝かれて、匂ひに待し、風もなし

物ことに、替はてぬれば、さこそ、神慮にも背、人非にも、落ぬらんと、あさましくみるに、目もあてられねとも、年久、住なれし跡なれば、臆而、見すつるも、名残おしくて、其夜は、新羅大明神のはいてんに、湖水の月を、うちなかめて、泣あかしつ

門主は、もし石山にや、御座あるらむと、たつねたれば、是にも、御座なしと、申ける程に、童、さ候は、今夜は参詣の人の躰にて、本堂に御座候へ、われ、山門へまかり候て、律師の御坊を、尋申候はんと、申ければ、若公は、うき世にあらぬ身とならむも、ふかく思さためたまふ心ありければ、よしやた、中く、とむる人なくは、ころのまゝに、いかなる淵河にも、身をしつめむと、おほしめして、なくく消息かきて、童にたひける

〔絵 第十五図〕

童は、文をたまはりて、いそぎ、山へ尋行ければ、律師は、童を見るより、更に、物をもいはず、たさめくと、なきたまふ、童も、涙押とめて、此あひた、有つる事をも、語申さむと思候へ共、先、ふみ御覽候へとて、さし出

したるを、ひらきみるに、あやしきこゝろの哥あり

わか身さて、しつみもはては、ふかき瀬の、そこまで照せ、やまのはの月

律師、これ御らんし候へ、御うたの、心もとなく、見えて候へは、何事も、道すから、御物かたり候へ、先、いそぎ参候はんとて、坂本より、童をさきたてゝ、とる物もとりあへす、石山へ行処に、大津を過て、旅人あまた行あひて、あはれや、此御ちこ、いかなるうらみありてか、身をなけたまひつらん、父母師匠の、いかはかり、なけきたまふらむと、いふを、あやしと思て、尋とへは、旅人、立とまり、只今、せたの橋を、わたり候に、としのよはひ、十六七はかりに、みえさせ給ふ少人の、紅の小袖に、水干の下はかりめされて候か、西に向て、念仏十遍斗となへて、身をなけさせたまひて候、あまりにかなしく、みまいらせ候程に、我等、やかて、水に入て、とりあけまいらせんと、おもひ候へ共、見えさせたまはぬほとに、ちからなく、まかり過候と、語て、涙をはらくと、こほしける

〔絵 第十六図〕

これをきくに、としの程、衣袈のさま、うたかふところもなし、律師も、童も、こゝろあきれて、たをれふしぬへき心ちすれとも、馬をはやめて、橋つめに行てみるに、若公の身をはなさす、かけさせたまひし、金襴のまもり、碧るりの小念珠を、橋はしらに、かけられたり

これを見て、律師も童も、おなしなかれに、身をしつめむと、もたへこかれけれ共、とり留ぬれば、よしや、そのむなしき、すかたなりとも、一目みて後こそ、ともかくもならめと、おもひて、桂海は、つなきすてたる、あま小舟にとり乗て、淵のそこを、のそみて、同宿の者ともは、岩のはさま、岸のかけまで、残ところなく、さかしけれとも、

みえたまはねは、天にあをき、地にふして、なきさけふこと、なゝめならず

遙、時うつりて、九この瀬といふ所まで、もとめくたりければ、せかれてとまる、紅葉はの、くれなるふかき色かと思えて、岩の陰に、なかれかゝりたる物あり、舟さしよせて、みれば、あるもむなしき、すかたにて、たけなる髪の毛、流もにみたれかゝりて、岩こす浪に、ゆられるたり

なくく、とりあけて、律師は、顔をひさにかきのせて、童は、あしをふところの中にいたき、うたてしの御ありさまや、我等をは、いかゝなれと、おほしめして、かゝる事は、ありけるそや、梵天、帝尺、天神、唯、我等か命めされて、今一目、むなしからぬすかたを、見せ給へと、声もおします、なきかなしめとも、落花、技を辞して、二たひさくならひなく、残月、西にかたふきて、又、半空に、かへることなければ、ぬれて色こき紅葉はの、しほくとしたるに、雪のことくなる、むねのあたり、ひへはてぬ、みたれてのこる、まゆすみの色、こほれかゝり、かんさしのみとりの髪、わりなき、かほはせは、かはらねと、一たひ咲は、もゝの媚ありし、眼ふたかり、色変しければ、律師も童も、あとまくらに、ひれふして、絶入はかりに、泣しつみ、其日一日は、もしやと、肌にむねをあて、あたゝめけれ共、叶さりけり

〔絵 第十七図〕

次の日、ちかき山の、とりへ野にて、一片の煙となしたてまつり、律師と童とは、一聚の灰に向て、三日まで、なき居たりけるか、同苔にも、うつもれはやと思へとも、いまはのきはに、送り給ひし哥に、そこまててらせ、山のはの月、とありしは、なからん跡を、とふらへとのためにこそあれと、思ければ、律師は、山へも帰らず、こゝより、や

かて、こき墨染に、身をかへて、その遺骨を、くひにかけ、山川を、とそふしけるか、後には、西山の岩籠イハカといふ所に、庵室をむすひて、彼後生菩提を、とふらひて、童も、臙、髪おろして、高野山に、とち籠て、つるに、山をは出さりけり

〔絵 第十八図〕

其後、園城寺の、三摩耶戒壇の、張本の衆徒三十人、いまは立かへり、住寺すへき様もなければ、世中、あちきなくおほえて、みな離山せんとしけるか、今一たび、寺門の焼跡に、立帰り、内證甚深の、法施をもたてまつり、発心修行の、いとまをも申はやと、おもひて、皆新羅大明神の御前に、通夜して、今をかきりの、法味をそさへける夜ふけて、東方の虚空より、馬を馳、車をとろかす音して、をひたへし、大人高客の、いきをひ有り、あやしや、誰なるらむと見に、法務の大僧正かやと、みえたり、高僧、四方輿に乗、大衆、前後に囲遶し、或、衣冠たへしき俗躰、各甲冑を対し、随兵をめし具し、或、玉のかんさしを、かたふけたる人、輕軒にのりて、侍りめ、す十人、左右にしたかひ、跡にさかりたる、かふいうに、是はいかなる人にて、御渡候そと、問へは、これこそ、東坂本におはします、日吉山王にて、御渡候とそ、答ける

此高客、みな輿車よりおり、幔の内へ入給へは、新羅大明神、玉の冠たへしくして、威儀をとへのへて、金帳のうちより、出向給ふ、賓主座さたまりて後、たへしき礼あり、舞曲のゑん有て、新羅大明神、まことに、興に乗して、歓喜のゑみをふくませたまふ、終夜、遊宴歓娛して、あくれば、山王も、還御なるに、明神、寺門の外まで、送りたてまつりて、とまらせたまふ

大明神、玉の橋をわたりて、社壇の内へ、いらせたまはむとするに、通夜の大衆、明神の御前に、ひさまつきて、涙をなかして、申けるは、三耶摩戒壇、建立の事は、一往の、てうきにまかせ、我寺の、こうりうを存て、興行仕事にて候へは、衆徒のひかこととは存候はず、然を、山門、みたりに、とゝのへ勅裁を、そむき奉り、数々のましやうをなし、当寺を焼はらひ候へは、神明仏陀も、さこそ御こゝろを、なやまされ候とこそ存候へ、それに、当寺敵対の、山門おうこの神、日吉山王に対して、宴をまふけ、興を尽、あそひたはふれさせ給候は、いかなる神慮にて候哉らん、斗かたくこそ、存候へと申は、明神、通夜の大衆を、皆御前にめされて、衆徒のうらみ申処、一往、其理あるに、似たりといへとも、これみな、天の禍患なり、それ、神明仏陀の、りしやう方便を、たるゝ日、かれを是して、福をあたるも、慈悲の至なり、順逆のえんを以て、我よろこふところをは、人いまたしらす、仏閣僧坊の焼たるは、さう急ひするに、在世のりやく有り、経論聖教の焼たるは、是をかくに、文者結縁あり、ういの神仏、あに生滅のさうなからんや、只、このみたりによりて、桂海か発心して、そこはくのけたうを、いたさむすることのうれしさに、歡喜のこゝろを、あらはしつるなり、山王も、是を悦たまはむかために、来給へり、石山の観音の、童に变化のとく、まことに、ありがたき、大慈大悲のちかひかなと、仰られて、明神、帳の内へ、いらせたまふとおほえて、通夜の大衆、一時に、夢覺て、同様にそ、語ける

〔絵 第十九図〕

若公の、身をなけ給ひしも、観音の变化なり、寺門の焼たるも、濟度の方便なりと、信心にめいしければ、三十人の衆徒、皆発心して、共に仏道をしゆせんとて、彼桂海か、瞻西上人と名をあけて、住たまふ、岩籠の庵室へ、尋行て、

見れば、三間のはう屋、半、雲を分、三秋の霜のよち、敗荷の衣うすく、一朝の風の前に、落菓のきしきマ、ともしからず、松ふくあらし、谷のこゑ、うき世の夢も、さめくと、なき人を、とふらふと覺て

むかしみし、月のひかりを、しるへにて、こよひやきみか、にしにゆくらん

と、書院の石壁に、かきつけてけり、君かきりなく、睿感ありて、新古今、釈教の部に、撰入させたまふ

徳不孤、必有隣事なれば、いとふとすれとも、同やうなる桑門、かなたこなたより、来しかは、みやこちかき所に、寺をたて、人をもひろく、りやくせんとて、東山に、雲居寺といふ堂を、建立して、春ことに、三尊来迎のきしきを、とりおこなひたまふ、二十五の菩薩、伎樂歌謡して、往生の人を、むかひマたまふさま、見人、信心を發さすといふ事なし、遠近踵を繼て、こゝにまうて来り、貴賤たなこゝろを合、敬礼す

仏種從縁起と、いふことは、かゝるをや申へき、聞人、共に感歎して、袖をぬらさぬは、なかりけり